

## 『奥の細道』の制作心理：平泉前後

杉浦，正一郎

<https://doi.org/10.15017/2332951>

---

出版情報：文學研究. 41, pp.99-134, 1951-03-10. The Kyushu Literary Society  
バージョン：  
権利関係：

# 『奥の細道』の制作心理

—— 平 泉 前 後

杉 浦 正 一 郎

頃日、『奥の細道』の旅に、芭蕉に随行して歩いた門人曾良自筆の、所謂『奥の細道随行日記』と、同じく曾良自筆の芭蕉自筆稿本『奥の細道』の臨写本とを入手する事が出来て、いろいろと芭蕉の『細道』に於ける制作心理を考へてゐる。曾良の『随行日記』は、彼が其の旅中、毎日旅籠の行燈の灯かげで、ちび筆をなめ乍ら記して行つたその日記の原物であり、之を芭蕉の『細道』本文と見比べてみると、芭蕉がいかに事実を曲げて創作化してゐるか、いかに多くのフィクションを書いてゐるか、明らかにされて甚だ興味をそゝられるのであるが、同じく曾良自筆本の『奥の細道』の方も、芭蕉が『細道』を決定稿とするまへの、ある時期の稿本を写し、それを後に決定稿によつて横に訂正してゐるもので、即ち芭蕉の推敲の跡を如実に示してゐるものなので、さういふ意味でいづれも芭蕉の制作心理を考へる上に非常に貴重な資料と云ふ事が出来ようかと思ふ。曾良自筆本『奥の細道』の事は、小島吉雄博士の御すゝめによつて、阪大国文学科の機関誌『語文』の第二輯に詳しい紹介文を

寄せたので此処には重ねて贅言を加へず、更にその内容上の研究は近く別に発表する事になつてゐるので多く触れないが、本稿に於いては、『細道』のうちの、もつとも有名な個所のひとつである平泉の辺の條をとり上げて、之に贅註を加へつゝ、まゝ芭蕉の制作心理を探つてみようと思ふのである。

『奥の細道』は日本の古典の中で、最もポピュラーなものゝひとつであり、私も十数年来、殆ど毎年のやうにどこかの学校の教室で之を講じて來てゐる。本居宣長が『源氏物語』について、幾度よんでも読み倦きるといふ氣持のおこらぬ古典であり、読むたびに新たななる感興を呼びおこされる、といふ風な意味のことを述懐してゐるが、私にとつて、この『細道』も亦『源氏』同様に感ぜられる。最近に至つて、右の二つの資料や、門人素龍に決定稿を清書せしめて、芭蕉自ら題簽をかきしるし、頭陀袋に入れて最後の旅に持ち歩いてゐた素龍自筆本の『奥の細道』原本が越前の愛発村から発見されたりして、研究資料として重要なものが大体出揃つた形である。そこで私は従来の自

分の研究に、之らの新資料からの寄与を加へて、『細道』全巻の考証評論を完成してみたいと考へてゐる。しかし『奥の細道』は考へれば考へる程十分わかつたとは言へない難しい古典である。みつめればみつめる程分らなくなる、といふのが本當の氣持である。そして反對に又、何気なく眺めてゐると、なにか不図思ひついたりする。すぐれた文芸作品といふものは、一体さういふものなのであらうか。私は自分のよみの足りない、文學的センスに恵まれないことを露呈するのを恥ぢつゝ、こゝに敢えてその一節についての考証評論を記してみる。制作心理の考察は、心証の問題が多く、科学的にかうだと断定出来ぬ事が多いので、いろ／＼異論もある事と思はれる。私の微意は、此の稿を通じて博雅の士の示教を得たいと冀ふばかりである。

## (一)

十二日、平和泉と心さし、あねはの松、緒たえの橋  
 々と聞伝て、人跡稀に雉蒐菟蕘の往かふ道、そこと  
 もわかす、終に路ふミたかえて石の巻といふ湊に  
 出。こかね花咲とよみて奉たる金花山、海上に見わ  
 たし、数百の廻船入江につとひ、人家地をあらそひ  
 て籠の煙立つけたり。思ひかけず、斯る所にも来  
 れる哉と、宿からんとすれと、更に宿かす人なし。  
 漸まとしき小家に一夜をあかして、明れは又しらぬ

道まよひ行。袖のわたり、尾ふちの牧、まの、萱ハ  
 らなとよそめにみて、遙なる堤を行。心細き長沼に  
 そふて、戸伊戸と云所に一宿して平泉に到る。其間  
 廿余里ほと／＼おほゆ。

芭蕉は平泉に行かうとして松島を出立した日を、右の本文の如く「十二日」と書いてゐるが、曾良の『奥の細道隨行日記』によると(以下、この書を單に『日記』と略称する)、実は五月の十日のことである。芭蕉は五月の一日に福島、二日飯坂、三日白石、四日から七日まで仙台、八日塩竈、九日松島に各々泊りを重ねて、この日、五月十日に平泉へとこゝろざしたのである。芭蕉はこの場所のみならず、『細道』全文中にその月日を記している箇所は、全部で十七箇所あるが、左に述べる通りそのうち正確な日附は八箇所、五箇所は正しい日附でないのである。即ち、

(1) 三月廿七日江戸出立(之は却つて曾良日記の方が「巳三月廿日出深川出船」として七の字を脱してゐる)、其の日は『細道』本文に「漸早加と云宿にたとり着にけり」と記して恰も早加に泊つたかの如き口吻であるが、実は早加を通り越して粕壁に泊つてゐる。之は日附は正しいが、旅行第一日目の宿泊地に既に芭蕉のデフォルマシオンがあるのである。

(2) 三月卅日、本文に「日光山の麓に泊る」とあるが、この旅をした元祿二年は三月は二十九日まで、三十日の暦日のない月

である。『日記』によると、実は四月朔日の事である。

(3) 四月朔日、「御山(註。日)に詣拜す」とあるが、之は同日東照宮参拜後、鉢石町の五左衛門方に泊つたので日附は正確に記されてゐる。

(4) 五月朔日、「其夜飯塚(註。今の飯坂温泉)にとまる」とあるが、之は『日記』によると、五月朔日福島泊、翌二日飯坂泊りが正しい。

(5) 「あやめふく日」、「仙合に入」とあるが、之は五月四日に仙合入りが事実である。喜浦ふく日は『西宮記』や『日次紀事』には五月四日とし、又『和漢三才図会』等には五日としてをり、五月五日のその端午の節句の日の当日をさして云つたのか、或はその準備をした前日を云つたのか、こゝでは芭蕉の意図がはつきり分らないので、この記載は明確に正否の判断がくだせないやうである。しかし、大体文学的に「あやめふく日」と云へば、やはり五月五日の当日をさすとみるのが常識的ではなからうか。旅人の芭蕉の眼に、家々の屋根にあやめの葺かれてゐるのが、ひどく印象的だつたのであらう。

(6) 五月十一日、「瑞岩寺に詣」とあるが、之は正しくは九日の事である。

(7) 五月十二日、「平和泉と心さし」とあるが、実は平泉へ行くかうとして(この記載も疑問のある事)は後述の通りである) 松島を出立したのは十日の事である。

(8) 六月三日、「羽黒山に登る」、之は事実の通りである。

(9) 六月四日、「本坊にをめて俳諧興行」、之も事実の通り。

(10) 六月五日、「権現(註。今の羽黒神社)に詣」とあるが、之も『日記』の通りである。

(11) 六月八日、「月山にのほる」とあるも、之は六日のことであつて、二日事実よりおくらせてゐる。

(12) 七月六日、「文月や六日も常の夜には似す」の句が「荒海や佐渡によこたふ天河」の句のまへに出てゐるが、いづれも創作地を示さず、句を二句ならべて記してゐる丈である。『日記』七月六日、今町(今の直江津)の條に「夜ニ至テ各来ル、発句有」と記し、当夜左栗らと巻いた歌仙の発句らしいが、『細道』本文にはどこで作つたか明示してゐないので、今問題の対象にはならない。

(13) 七月十五日、「金沢は七月中の五日也」と見えるが、之は『日記』の事実の通り。

(14) 八月十四日、「十四日の夕暮、つるが津に宿をもとむ」とあり、之以下は山中温泉で曾良が芭蕉に別れて先立つて伊勢の方に行くので、『日記』の事実と比べる事が出来ぬため眞疑の程をたしかめ難いのである。

(15) 八月十五日、さきに「名月はつるかのみなとにとたひ立」とある、予定の如く敦賀にゐるが、相にく雨で「名月や北國日和さだめなき」の句が出来た。

(16) 八月十六日、「種の浜に舟を走す」とあるが、之らも今たしかめ難い。

(17) 九月六日、「伊勢の遷宮おかまんと又舟にのりて」大垣から揖斐川を伊勢の杉江の方に(『日記』)くだるのであるが、この辺は先発した曾良がまた九月三日に芭蕉をむかへに大垣にゆき、そのあと又『日記』が参照出来るのであるが、この六日の日附は事実である。

——以上十七個所の記載のうち、正しいもの八、否なるもの五、正否不明のもの四といふ割合となり、紀行文といふ常識からすれば正しくない日附が殊更に多すぎるやうである。

芭蕉は越後の(『細道』には「越中の」)市振で二人の遊女と泊り合せ、例の「一家に遊女もねたり萩と月」の句が成つた條の、すぐそのあとに「曾良に語れば書とめ侍る」と記してゐるが——芭蕉はかう言つてゐるのに曾良の『隨行日記』には

「書とめ」た筈の記載が全然見えないので、或は之も、一作中「ものがたりの駄」もありたいと云つた芭蕉の例のフィクションかも知れないと疑はれるが——かういふ筆つきからすると、この旅中かうした記録類はすべて曾良に一任して(『隨行日記』のあとの『俳諧書留』に実に詳しく彼等師弟及び其の土地々々の連衆一座の作品をこくめに記録し、又『備忘録』に名所旧跡などを詳しく)、芭蕉自身は他の事にわづらはされずに、専ら自らの感興に沈潜しようとしてゐたのか知れぬし、曾良の『日記』程詳細な日記は書かなかつたのかも知れないが、それにしては後に『細道』程の大作を——芭蕉にとつて、之ほどの長篇は他に類がない——完成した芭蕉がその材料として何の記

録も持たなかつたとは考へられない。もつとも那須の黒羽で世話になつた鹿子畑翠桃を桃翠と誤記したり、名取郡笠島のあたりで、藤中將実方の塚を道より左りとかくべきを「遙右に見ゆる山際に」と誤つたり(この右は從來素龍の清書のときの誤写しい。前記『語文』)と云はれて来たが、芭蕉自身の誤記ら第二輯拙稿参照)、前記の如く越後の市振を越中とまちがへたり、松岡の天龍寺を丸岡と思ひちがひしたり、之等いくつかの誤謬を犯してゐる事を思ふと、甚だ心許ない氣持もするが、それにしても全然ノットなしに『細道』が出来上つたものとは思へない。さうとすると、このやうな多くの日附のちがひは如何に解釈すべきであらうか。

さきの表示の(2)の三月卅日の條、曆にない日を記してゐるのは何としてもいぶかしく、ために志田延義氏は、昭和二十二年六月号の『俳句研究』に「奥の細道、此日の説」と題して、この卅日の「卅」の字は「此」といふ字と草昧が似てゐる事からの素龍の写しちがひで、芭蕉の原稿には「此日」とあつたのだらうといふ説を出された(志田義秀博士著『新註』)此の説はなかなか面白い思ひつきだと思はれるが、前記の、芭蕉の未定稿の草稿を臨写したと考へられる曾良自筆の『細道』にも、明らかに「卅日」とあつて、「此日」とあつたやうな形跡は見えないのである。あるひは別に、三月のみ、そかに日光山の麓に泊つたといふ意味で、この三日はみ、そかが廿九日であつたのに、卅日を見、そかとよませるつもりでかう書いたのかも知れない。

しかし、いづれにしても甚だ苦しい解釈で、もつと素直に考へれば、芭蕉の思ひちがひと言つてしまつて良いのかも知れない。

(4)の飯塚泊りの條の「五月朔日の事也」と、実は五月二日なのに、朔日と言つたのは、前文の医王寺での「笈も太刀も五月にかされ昏戦」にひかれての事で、紙帳の縁で、それと印象的にするために「五月朔日の事也」と言ひ切つたのかと思はれる。此の箇所は、実は曾良の自筆本には「弁慶が笈をもかされ昏戦」とし、それを消して「笈も太刀も五月に」と改めてをり、之につゞく次の他の文は、「五月朔日の事也」と初めあつたのを、反対に「事にや」と改めてある。即ちはじめ芭蕉の案では句に「五月」の字がなかつたので、他の文で「五月朔日の事也」と之を印象づけるべく、二日を殊更に朔日と言ひ切つたのではなからうか。そして、再案して、句に「五月に」の語が入つたので、他の文の方を「朔日の事にや」とほかしたのではなからうか。素齋清書本に又「事也」となつてゐるのは、芭蕉が又考へ直したのであらうか、其の辺の事情ははつきりしないけれども、この場合はやはり、五月二日と云ふより朔日とした方が文勢としては、はるかに生きてくると思はれる。

(6)と(7)は、各々二日づゝ繰り下げて日附が誤られてゐるが、之は全然芭蕉の作為の理由が考へられない。今問題の「平和泉と心さし」た日を、本当は五月十日なのに、十二日にしたところで何といふ事もなささうである。

(11)の月山に登つた日を、実は六月六日の事だのに八日とし

て、之亦二日繰り下つてゐる。之が(6)、(7)と連続して二日下つてゐるのなら、日附がずつと間違つて来たと思へるかも知れぬが、その間に羽黒山の辺の(8)、(9)、(10)の各項が正しく書かれてゐるのでさうも言へない。此の條は会覚阿闍梨の「こまやかにあるじせら」(細)れた好遇を感謝する気持から、二日永く緩りと滞在したやうにデフォルメしたのであらうか。——以上いろいろ考へてみたが、分らぬ事が多く、全然虚構のもつ意味の推定のつかない項がいくつもある事を思ふと、芭蕉のノートが記録的にしつかりしたものでなく、さうした日附の正確などに大して重きをおかなかつたのではないかと思はれる。芭蕉にとつては日附のことなどより、むしろやはり詩人としての感興の方が何より大切だつたのであらう。

芭蕉は「芳野紀行」(笈の)の冒頭の部分に自らの意図する

紀行文について次のやうに記してゐる。即ち、  
そも、道の日記と云ものは、紀氏・長明・阿仏の尼の文をふるひ、情を盡してより、余はみな佛似かよひて、其糟粕をあらたむることあたはず。まして浅習短才の筆に及ぶべくもあらず。其日は雨降、晝よりはれて、そこに松あり、かしこに何と云川ながれたりなど云こと、たれ、も云べく覺侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云ことなけれ。されども其処、の風景心に残り、山館野亭の苦しき愁も、且は嘶の種となり、風雲のたよりも思ひなして、わすれぬ処、跡や先やと書集め侍るぞ、猶醉るもの、慥語にひとしく、い

ねる人の讒言するたぐひに見なして、人また亡聴せよ。

と書いてゐる。奇を以つて鳴つた黄山谷や、新を以つて称せられた蘇東坡の如き大詩人でなくては、「其日は雨降」とか「かしこに何と云川ながれたり」など言ふ事をこまごま書き記したところで、文学作品としては意味がないだらう。けれども殊更に「心に残」つた「其処々」の風景や「苦しき愁」を感じた「山館野亭」の思ひ出の、「わすれぬ処々」を「跡や先やと書集め」るのこそ自分の考へる新しい俳文の紀行文だと云ふのである。「人また亡聴せよ」とは言ふものゝ、さうした謙辞の外に、芭蕉の自ら俳文の上に新機軸を出さうと志した新しい紀行文への抱負を十二分に暗示してゐるやうに思はれるのである。右の文をかきつけた「芳野紀行」ではなほ十分円熟しなかつたけれども、この『奥の細道』に至つて、芭蕉のかうした俳諧紀行文に対する抱負は完全に達成せられて、こゝに珠玉の芸術作品と結晶したのであつた。こゝにも芭蕉は「跡や先やと書集め侍るぞ云々」と言つてゐるが、記録的な前後など「跡」でも「先」でも、芭蕉にとつて大した事ではなかつた。『細道』中にも事実にして記事の前後してゐるところもいくつもあり、要は一個の芸術作品として渾然たるものになればよかつたのである。右の考へをおしすゝめれば、同じく記録的な日附の正確など芭蕉の関心事でなかつたとも云へようか。

日附の問題から少し脇道にそれたが、本文にかへらう。さて、芭蕉は「平和泉と心さし」た。こゝで、今日我々が平泉と

かくべきを「平和泉」とかいてゐるのは見馴れぬ書きざまであるが、芭蕉の『細道』の旅と同年の元禄二年正月刊の、西鶴の『一目玉鉢』にも「平和泉」と書かれてをり、元禄九年芭蕉の後を慕つて奥州を旅した、蕉門桃隣の『陸奥寄』にも、「平泉」と共に「平和泉」を書いてゐるし、其の他天明四年刊の百明の『奥能遊奇々』(奥往)にも「平和泉」と記してゐて、其の他博搜すればいくらもあらうが当時かうした書き方の方が多かつたやうである。もつとも曾良の『随行日記』には下記の如く「平泉」と書き、享保二年刊の祇空の『烏絲欄』にも「平泉」とあり、又元文五年刊の馬州の『奥羽笠』なども「平泉」と記してゐて、両様に書いたものと思はれる。

芭蕉は、平泉へとこゝろざして、「あねはの松緒たえの橋など聞伝て、人跡稀に雉兎菟蕪の往かふ道をもわかす終に路ふみたかえて石の巻」に出たと云ふ。この文章の「あねはの松」は例の『伊勢物語』の「栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを」の古歌で著名だが、『古今集』卷二十の「みちのくうた」にも「をくろさきみつこのじまの人ならば都のつとにいざといはましを」の歌があり、この『古今集』の方の地名も『細道』の平泉のすぐあとに、岩手の里から「小黑崎みつの小島を経てなるこの湯より云々」と見えてをり、今の鴨子温泉の近くである。あのあたり一帯に、かうした伝承の東北民謡歌があつたものと思はれる。この松は陸前国栗原郡沢辺村姉齒にあり、松島から北十四里ばかり、今の東北本線の小牛田

と一の関の中程の石越駅から栗原鉄道で西北へ一里入つたとこ  
ろである。桃隣は平泉見物ののち、金成村のつくも橋をみて、  
そのあとに「行けば沢辺村十五丁南、川向にあねはの松あり。  
則此辺栗原と云」と記してゐる。芭蕉らも亦、曾良の『日記』  
によると、平泉一見ののち、一の関から五月十四日の日に、岩  
崎、岩手山へのコースをとり、この時こそあねはの松の近くを  
通つた筈なのに『日記』にも『細道』にも此の條には全然松の  
記事が見えない。松島からまつすぐに北上して陸羽街道を往け  
ば金成、沢辺のあたりを通るので、芭蕉はその予定のコースを  
こゝに述べたのである。

「緒たえの橋」は之亦歌枕で『後拾遺集』の「みちのくのを  
だえの橋やこれならむ踏み踏まずみ心まどはず」といふ左京  
大夫道雅の歌以下多くの古歌があるが、此の方は松島からは余  
程ちかく、志田郡古川町にあり、松島から西北七里位の地点で  
ある。之も予定のコースからは姉齒の松をみる、はるか手前の  
道中に眺めうる筈であつた。曾良の『奥の細道、名勝備忘録』  
（之は故山本六丁子氏の活字本の『随行日記』ではことわりな  
しに日記よりあとに收められてゐるが、原本はさうでなく此  
の方が先きで、曾良は出発まへに、かうした旅行予定地の下調  
べを詳しくかきとめてゐるのである。そして後に实地をみてか  
らいろく）と書き入れ）には、「緒絶橋（架ノ絶コトニヨメリ  
してゐるやうである。）には、「緒絶橋（架ノ絶コトニヨメリ  
エテ）」と記してゐる。例の桃隣は『陸奥衝』よると、古川の宿  
に泊り、「緒絶橋、此古川の町中にあり。此橋の名爰かしこに  
ありて、以上四ツは覺へたり。何も故有事にや」等と書いてゐ

る。『細道』本文に「平和泉と心さし、あねはの松緒たえの橋  
なと聞伝て」と芭蕉がかいたのは、石の巻に寄らずに、まつす  
ぐに陸羽街道を北上したときに立寄るべかりし歌枕であつたの  
だが、予定のコースを変更して其の辺をこのとき通らなかつた  
ので、松島からの距離も実際とは逆に記しつゝ、簡単に「なと聞  
伝て」とすましたものであらう。「人跡（曾良自筆本『細道』  
と振仮名し、のちそれを朱で消し、ジンセキと音）稀に雉兔葛  
でよますべく朱で二字の間に一をひいてゐる。）稀に雉兔葛  
蕪の往かふ道そこともわかす」と本文にいふのは、芭蕉の歩い  
た石の巻街道は、小野、矢本からあとは平地だから、おそらく  
高城から小野の手前鳴瀬川に出るまでの山路、一の瀬の峠道の  
辺をさして云つたものかと思はれる。そこで芭蕉は道を「ふみ  
たかえて石の巻」に出たと云ふのだが、こゝにも芭蕉の虚構が  
あると考へられる。前記のごとく小野から先きは道ふみたがえ  
る事もない筈だし、小野で気づけば、すぐ鳴瀬川に沿つて野蒜  
街道を北西進すれば陸羽街道にそのまゝ出るのであるから、う  
かうかと矢本新田まで行つてしまつたとは思へないのである。  
飯野哲二氏の『おくのほそ道の基礎研究』によると、元祿の仙  
台藩領内地図では、松島から平泉へゆくべき古川街道と石巻街  
道とは、松島の東の高城と小野との中間の左坂のすぐ東から  
岐れてゐる由である。而して曾良の詳しい『日記』にはこの日  
の行動を次の如く記して道を踏みちがへたことは全然かゝれて  
ゐず、矢本新田で逢つた人に石の巻の宿を紹介されて無事にそ  
こに泊めてもらつてゐるのである。『日記』には、

一、十日(註)五月馬次ニテナシ開サトキ快晴。松島立。馬次高城村、小野、石巻。仙台松島郡十三里余。小野石ノ巻ノ間、矢本新田ト云町ニテ咽乾、家毎ニ湯乞共不与。道行人、年五十七八、此体ヲ隣テ知人ノ方ヘ巷丁程立帰、同道シテ湯ヲ可与由ヲ頼。又、石ノ巻ニテ新田町四兵衛ト尋、宿可借之由云テ去ル。名ヲ問。ねこ村、ユノン源左ト答。如教、四兵衛ヲ尋テ宿ス。

右の如く記してゐる。此の辺は、芭蕉らも湯を家毎に乞うたけれども呉れなかつたと云ふが、元祿十六年渭北が翁のあとを慕つて陸奥を歩いた記録『安達太郎根』をみると、渭北は翁らと同じく松島から石の巻に出てゐるが、途中小野に泊り、「此夜は小野の里に宿を乞ぬるに、咎して蕙を圃ひ、馬の尿すること枕もとに響、蚤しらみの責」をうけてねむれなかつたと述べてをり、このあたりは当時余程ものわびしげな所だつたと見える。

石の巻への道は、事実一部は現在もさうだから、当時はなほ更心細いところもあつたであろうが、しかしかりにも石の巻街道であるから、獵人や樵夫の往かふ道をそこもわからず、終に路ふみたがへたといふのは、いつもの旅のあはれを述べるための幾分の芭蕉の誇張と例の虚構があるのであらうと思ふ。と同時に、みちのくのかゝる道の果てに、思ひもかけず賑やかな湊まちを見出したロマンティックな驚きを「なつかしく言ひ」とつて芭蕉は述べたのであらう。桃隣も「行／＼て石の巻、仙台領也。諸国の廻船を請て大湊、人家富たり。石の巻といへる事、川の洲に立石有。行水巴に成て是を巻く。昔より今に替ら

ず、されば石の巻とはいひゆるる、所は辺土ながら詩歌、連誹の達人寵れり」(陸奥)と言つてをり、又享保四年の序のある、佐久間義和の『奥羽観蹟聞老志』にも「石巻海門云々、斯地也、市店運屋、漁家比隣、商賈群集、農工雜居、繁華輻輳、殆若二江都海浜一。商船之出入、漁艇之来往、日夜泛々、朝夕羃々」とあり、当時の石の巻の繁栄のさまが偲はれるのである。白河の関を越えて以来、「旅心定まつて」寂しい荒涼たるみちのくの奥の細道を歩きつゞけて来た芭蕉にとつて、豁然と目前に展けた賑やかな石の巻の湊は、まことに山の彼方の空遠くに幸ひを見つけた人のやうに、心弾みを覺えた事だらうと思はれる。「思ひかけす斯る所に來れる哉」といふ芭蕉の述懐はさうした詩人の新鮮な驚きと、旅ゆくものよろこびとを生々とした微妙なひびきを感じしめる。芭蕉はおそらくさうした文学的効果を計算の上で、道ふみちがへて思ひもかけず、石の巻に出たと虚構を設けたものであらう。

芭蕉が石の巻から金花山が見えるやうに書いてゐるのは何かのまちがひで、石の巻からは金花山は見えず、網地島の誤りである。この事は曾良の『奥の細道名勝備忘録』にも「金ナ山。金花山、仙台ガモ見ユル。石ノ巻、松野ガハ猶近ク見ユル高山也。鳴也。」と記してゐるから、或は土地の人に聞かず、曾良に聞いてうかと間違を記したのかも知れない。又、芭蕉が金花山を『万葉集』(卷十)の家持の例の「すめらぎの御代栄えむとづあづまなるみちのく山に黄金花咲く」の歌の地と信じてかい

てゐるのは、曾良も同様にさう思つてゐたらしいが、此の辺のもつとも詳しい地誌の『奥羽觀蹟聞老志』や、広く流布した『和漢三才図会』等にも、同じく金花山を、みちのく山と見てゐるやうだから、当時一般に行はれてゐた俗伝と思はれ、芭蕉丈の思ひちがひではなさうである。今日では、實際は、遠田郡湧谷町の黄金山神社の辺だらうと言はれてゐる。

さて、芭蕉は「宿からんとすれと更に宿かす人なし。漸ましき小家に一夜をあかして、明れは又しらぬ道まよひ行」と書いたが、之は明白に虚構である。前引、『日記』の記事の如く、途中で逢つた親切な人の紹介して呉れた石の巻新田町の四兵衛方に無事に泊つたし、翌日は『日記』十一日の條によると、後述の如く、道連れに案内されて気持も樂に旅をつづけたのであつた。

石の巻に宿をとつてから、芭蕉たちはどうしたのであらう。

『細道』には何の記載もないが、曾良の『日記』には、前引十日の條のつゞきに、

着ノ後、小雨ス。頓テ止ム。日和山下云へ上ル。石ノ巻中、不殘見ユル。奥ノ海今ワタノ、遠島、尾駮、牧山、眼前也。眞野萱原モ少見ユル。帰ニ住吉ノ社參詣、袖ノ渡リ、鳥居前也。

とあつて、着いて間もなく雨の止むのを待つて、石の巻を見て廻つてゐるのである。『細道』本文には、翌日の事として、「明れは又しらぬ道まよひ行」につづけて、「袖のわたり、尾ふち

の牧、まの、萱はらなとよそめにみて、遙なる堤を行。心細き長沼にそふて、戸伊戸と云所に一宿して平泉に至る」と記してをり、こゝにも芭蕉の作爲が見られるのである。

桃隣は石の巻について「辺土ながら詩歌、連誹の達人籠れり」（陸奥衛）と記してゐるが、芭蕉は『日記』によると、之らの土地の俳人達ともつき合はなかつたやうである。芭蕉の『細道』の旅を、自らの勢力範囲をひろめ、自分の俳諧を流布せしめやうとする積極的な目的もあつたのでないかといふ説もあるが、かうした見方は、少くとも『奥の細道』の旅以後の芭蕉にあつては全然當つてゐないのである。たとへば『奥の細道』の旅で芭蕉の風を慕つて門人になつたものは周知の如く極く僅かであり、知らぬ土地に行つて、芭蕉自ら土地の俳人達に好みを求めて行つた事は、前からの知り合ひ、又は俳壇に知名の士以外には全くないのである。仙台に着いた翌日（五月）の『日記』に「三千風尋ルニ不知。其後北野ヤ加右衛門ニ逢委知ル」といふ記事があつて、俳壇的に著名人だつた三千風などには早速連絡して逢ひたがつたりしてゐるが、そして旧知の須賀川の等窮や尾花沢の清風などはこちらから訪ねて行つて、のんびりと世話になつてはゐるが、門人を新しく獲得し、自らの勢力範囲を積極的に求め広めようなどゝの意志は全く見受けられないのである。却つて『細道』後出の大石田の條などには、「最上川のらんと大石田と云所に日和を待。爰に古き俳諧の種こほれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一声の心をやはらけ、此道にさ

くりあしゝて、新古ふた道にふみまよふといへとも、みちしるへする人しなればとわりなき一卷残しぬ。」と記し、土地の俳人達に求められて、止むを得ずわりなき、一卷の指導をしたと云ひ、そして「このたひの風流爰に至れり」と述懐してゐるのである。この述懐は、まんざらでもない芭蕉のデェスチュアがあるのではないかと見られぬ事もなく、或は多少あるやうでもあるが、素直に芭蕉の言を聞けば、こゝにもやはり積極的な芭蕉の意図は見られず、自ら求めずして、かゝる辺土に自分の風を教へる因縁をえたことをよるこぶと共に、却つて何だか迷惑さうな芭蕉の横顔もちらつくのである。芭蕉の旅は、決して功利的な目的をもつたものではなかつた。あの長途の旅の曾良と二人の旅費をどうしたのだらうと、人事乍ら氣になるのである。恐らく杉風等の江戸の門人達の饑別・喜捨を用意して行つた事と思はれるが、——『笈の小文』に「草鞋の料を包て志を見す」とある如くこの時も旅銀をも餞けされた事であらう——それも余裕のあるものではなかつた。『日記』の八月十日、敦賀の條に、芭蕉と別れて先だつて伊勢へゆく曾良は「夜前出船前（註。九日の）、出雲ヤ彌市良へ尋隣也。金子耆兩翁へ可渡之旨申頼預置也」と書きとめてをり、自分の旅費を割愛して芭蕉に一两の金子を托し残して行つて居る。かうした新たに知られた事実などからも、後の俳人達のやうに行く先々で草鞋錢を貰つて歩くといふ風なさまもしい旅ではなかつた事が想像されるのである。たゞ一個所丈、曾良の『日記』によると、越後村上

で、二千四百石取の家老、柳原帶刀から「百疋給」とある例外があるが、時と場合によつて因辭出来ない時もあり、相手の好意を快く享けるといふやうなときもあつたであらう。なほ芭蕉の經濟生活については、別稿で詳しく考へてみたいと思ふが、いづれにしても、芭蕉の旅は専ら天地自然に没入し、自らの人生觀を深め、自らの芸術境を高める以外の世俗的、功利的な事は一切考へられてゐなかつたと思はれる。

芭蕉らは十一日、石の巻の宿を立つて戸伊（註。登米）に赴く。『日記』には、

一、十一日、天氣能。石ノ巻ヲ立。宿四兵衛ト一人、氣仙へ行トテ矢内津迄同道。□町ハツレニテ離ル。石ノ巻ニリ、鹿ノ股一リ余。

「異余隣者」 三リニ遠シ。此間山ノ矢 日雲 伊達大城  
飯野川 内津ア□長キ沼アリ。 一リ半 ○戸し満

□口が宿不借。□檢断告テ宿ス。 此間ニ渡シニツ有 檢断庄太郎

とある。即ち、石の巻泊りの翌日は、氣仙沼へゆく宿の主四兵衛と、今一人のひと、二人の道連れがあつて、この人々に案内されて矢内津（註。今）まで四里ばかり同道して北上したので、知らぬ道迷ひ行つたのではなかつた。氣仙沼にゆく四兵衛は、柳津で別れて東浜衛道を東北進して海岸沿ひに行つたぐらうし、芭蕉らは柳津からそのまゝ北上して約一里半の登米に宿つたのである。登米（日記には一戸）では宿が借れず、檢断になげき寄つて漸く野宿をまぬがれたのである。石の巻は紹

介された四兵衛方に、實際は無事に泊めてもらつたのに「宿からんとすれと更に宿かす人なし」など、虚構してゐるのは、右の登米の條の困却を前日の日の事にデフォルメしたのであらう。芭蕉の頭には、矢本新田あたりで咽喉がかわき、家毎に湯を乞うたが呉れなかつたといふ(日記)旅の忙びしさが、或はちらつてかゝる虚構となつたのかも知れない。

「袖のわたり」は『新後拾遺』の相模の歌「陸奥の袖のわたりのなみだ川心のうちにながれてぞすむ」などの古歌に知られた歌枕であるが、曾良の『奥の細道、名勝備忘録』には「石ノ巻町ハツレ住吉ノ社有。鳥居ノ前、眞野ノ方へ渡ルワタシ也」と記してゐる。今の石の巻市の北部の住吉町にある北上川の渡し場である。又「尾ふちの牧」は『後撰集』詠人しらずの歌、「みちのくのをぶちの駒も野かふには荒れこそまされなつくものかは」の歌や、『蜻蛉日記』の「我れが名を尾駁の駒の荒ればこそなづくにつかぬ身とも知られぬ」の兼家の歌に知られる歌枕で、之も『備忘録』に「石ノ巻ノ向、牧山ト云山有。ソノ下也」と記してゐる通り、石の巻の対岸、東一里の牧山を指すやうだが、芭蕉らが登つた日和山からは「尾駁牧山、眼前也」(日記)といふ如く、すぐ眼のまへに芭蕉は見えてゐるのである。袖のわたりも、『日記』に日和山からの「婦ニ、住吉ノ社参詣。袖ノ渡リ(山本氏の活字本には「神鳥居前也」とある如く到着の日に二人は既に見物してゐるのであつた。だからこの「袖のわたり、尾ふちの牧、まの、萱はらなとよそめにみ

て」といふ文章は、事実に則して考へると、「よそめにみて」の一句はすぐ上の「まの、萱はら」丈にかゝる言葉で(尾ふちの和山から眼前に見た丈で、その)、上の二つの歌枕は、近くのも土地まで行つたわけではないが)、の一寸上においた位の軽い気持なのであらう。かういふ文のつゞけさまは別に破格といふ程でもないと思ふ。

その「まの、萱はら」は、日記によると、石の巻到着の日、登つた日和山から「少見ユル」と記してゐるが、『備忘録』には「石ノ巻ノ近所老リ半程有。山ノ間也。袖ノ渡ヲ越行也」とある。石の巻の東北一里半、雄勝峠に至る麓のやまあひの辺である。今、牡鹿郡稻井村の大字になつてゐる。この歌枕は、こゝに『万葉集』の笠郎女の歌「みちのくの眞野の萱原遠けども面影にして見ゆとふものを」によつて著名になつてゐる。

さて、『細道』本文に「遙なる堤を行、心細き長沼にそふて」戸伊戸についたとあるが、この堤は勿論北上川の堤である。『日記』によつて、芭蕉の行程がはつきりするが、二人は石の巻から鹿又(日記には「鹿ノ」)に行き、それから北上川を渡つて飯野川、それから関街道を北上して柳津に至り、又北上川に添つて登米に到つたのである。即ち、中程の飯野川から柳津まで三里程の道以外はこの日は一日の行程の半分は迂曲した北上川(石の巻から鹿又まで)と追波川(鹿又から飯)の堤を歩いてゐるので、さればこそ芭蕉は「遙なる堤を行」と書いたのであらう。飯野教授の著作『おくのほそ道の基礎研究』によると、「芭蕉が石巻の湊のまどしき小家を立つて、北上川の堤

の東岸に沿うて辻堂に至り、船渡して飯野川に渡られ、それから心細き長沼に沿うて登米に出られたことは殆ど決定的と云つてもよからうと思ふ」とあるが、『日記』には鹿ノ股(註。今)を通つたやうに見えるから、そして鹿又(鹿又)まで渡しの記載なく、鹿又から飯野川までの間に「渡有」とみえるから、芭蕉は石の巻から北上川の東岸でなく西岸を北上して鹿又に至り、そこから北上川を渡つて飯野川に出たものかと思はれる。飯野教授の労作は『随行日記』の発見以前の研究だから、この辺の土地に詳しい教授の『日記』によられた其の後の研究に教へを受けたいと思ふのである。次の「長沼」について飯野氏は「芭蕉の通られた元祿以前、慶長年間に仙台藩祖伊達政宗が川村孫兵衛と云ふ者に命じて、北上川の川筋を柳津の所から今の西廻りの川筋の方に開鑿変更せしめたのであるが、そのために埋没してしまつた旧北上川の川筋の名残が湿地となつて、断続的に長い沼のやうになつてゐたのである。しかし上述の飯野川から登米に至る街道は此旧北上川に沿うてゐたのであつて、其街道を北上した芭蕉はその名残の沼の如きか湿地を長沼と見たのである」と説かれ、現在はその旧北上川の川筋は一つの新川になつてゐるために、その湿地の跡が見られなくなつたが、明治初年頃までは断続的に長い沼のやうになつてゐたと、土地の故老は言つてゐる由を記されてゐる。『日記』にも「長キ沼アリ」と書かれてゐるから、「長沼」は、登米の西三里ばかりのところ長沼といふ大きな沼があるけれども、之は個有名詞でなく普通

名詞と見るべきである。今日でもなほ飯野川の少し北、根岸と合戦谷との間に細長い沼が残つてゐるやうである。

芭蕉等は登米(トイマ)と書き、曾良は戸い満及び戸今と書いてゐる) 検断庄太郎方に泊めてもらつた(日)らしいが、登米は石巻から北八里程であり、大体「天氣能」きまかせて芭蕉らの普通の行程を歩いて行つたやうである。庄太郎といふのは土地の口碑では蓮沼家と云ひ伝へてゐるさうで、同家はのち断絶して現在では吉田常治氏宅になり、同家の裏手北上川堤下に「芭蕉翁一宿の跡」といふ石標が立つてゐる事が飯野氏の著書に見える。

さて、芭蕉は戸伊戸に一宿してから、すぐ平泉に至ると、『細道』本文に書いてゐるが、『日記』によると、実は其の間に一の関泊りがあるのである。即ち、『日記』五月十二日の記事は、

一、十二日、曇。戸今(註。登米)ヲ立。ミリ長口町北階出。

湧津三リ行。雨強降ル。馬ニ乗ル。加沢三リ皆山坂ナリ。一ノ関合羽宿ス。

とある。この日は、芭蕉らは登米を発つて、一の関街道を西北進した。登米から三里の上沼(うはま)へ、それから岩手縣に入り、三里行つて湧津(山本氏の『日記』活字本には涌)に出で、それから

ら金沢をすぎても、『日記』に加沢とあり、三里の一の関(一の関)の

手前、眞滝村鬼死骸たてしがい（一）の関街道が陸羽街道と合するらしい）では、「上沼」の右傍に「長□町比雨降出ル。一リ」とあり、上沼から一里とすると、この長□町は永井をさすものと考へられる。永井辺から雨が降り出し、ますます烈しくなつて来たため、涌津辺で馬に乗つたが、夕暮に一の関についた頃は合羽もとほる程のつゞ濡れであつたらしい。松島から涌津までずつと歩き通して二人共馬にのらなかつたと『日記』に見える。一の関の宿ははつきりしないが、一の関地主町の金森家に泊つたといふ口碑を飯野氏は紹介され、同家藏の文献を記してゐられる。一の関の宿は、芭蕉は翌日平泉をみてから、その夜も泊つたから二夜宿泊した事になる。小林文夫氏の『平泉と西行と芭蕉』によると、金森家の芭蕉関係の文書は、先年の大水害の時、全部流失して今は何もない由であるが、その昔あつた文書の中に「二夜庵記」その他の資料があつたらしい。次に引用の文書は、飯野氏も早く紹介してゐられるが、抜抄らしく小林氏の方が長文なので、（之も書き出しが唐突故、この前が、小林氏の著から引かせていたゞく。「尾陽塾田一井亭」とまられて、旅寢よし宿は師走のと申一句を残され、又瓢竹庵にては、花を宿にはじめ終りや、別れに及ぶ時、此程を花に礼いふとの二句侍りたり。みちのく行脚の折は一関なる金森氏に、杖をとゞめられて、翌日あるじに中尊寺へ案内させて、終に其夜もとめ申て、いよ／＼二夜庵のちぎりあさからず引續くを、今のあるじ

### 『奥の細道』の制作心理

は一筆とあるを、なによりの翁の記念なればかの高館の二句をしるす。

夏草や兵ともが夢の跡  
五月雨の降残してや光堂

万延元 泥灘南呂 千鳥庵田末

右の他、碧海直の漢文の記や、沢田穂国の和文の記、子紹の短文等にも、すべて金森家の二夜庵の名の起りを、翁を二夜泊めた事に由来すると述べてをり、『日記』でも同じ宿に泊つてゐるらしい口碑だから、右の口碑は信じてよからうと思ふ。前記、田末の文によると、金森家の当時の主人が芭蕉らを平泉へ案内したとあり、飯野氏は過去帳を調査されて、宝永五年に歿した金森利平（法名、一関）が案内した其の人だらうと云はれてゐる。ところが『日記』にはさうした案内された記事が全然見えず、案内したといふのは、例の「宗祇の蚊帳」式の嘘かも知れず、そのまゝ信ずるにやゝためらふのである、『日記』十三日の條に、平泉一見して「申ノ上刻」一関に帰り「主水風呂□ヲシテ後宿ス」とあるが、風呂の下の方の字がよめない。この字の如何によつては、主水が金森家の主人の名前だつたかも知れないと思ふ。

芭蕉は『細道』に、平泉のあとも、すぐ「南部道蓋にみやりて岩手の里に泊る」とはしよつて、往復ともに二夜泊つた筈の一の関を全然筆によせてゐないのである。之は一体どうしたわけであらうか。

之はおそらく、この『細道』全文のひとつの大きなや、まである平泉の描写を出来る丈鮮明に浮き立たせるために、その前後のどうでもいゝ宿泊地の説明など故意に省略して了つたのではなからうか。「三代の榮耀一睡の中にして」といふ、あのあらたまつた書出しに初まる平泉のところの文章は、松島・象瀧と共に『細道』全文中芭蕉がもつとも心を籠めて書き記した部分であるにちがひない。そして、その前後にごたごたと日記・記録風に宿泊地の詳しい説明などする事は、平泉の印象をぼかしてしまふ逆効果しかなかつたであらう。まへに引いた「芳野紀行」の「道の日記」の論のなかで、其の日は雨降り、昼よりはれて、そこに松あり、かしこに何と云ふ川ながれたり等いふ事は、紀行文の芸術性の上から書かでもの事だとする芭蕉の意見が、こゝに形をかへて現れてゐるのである。『奥の細道』の未定稿には、越路の辺の事情が詳しく書かれてゐたのを、推敲の時に、芭蕉自身が墨や朱でもつて十字に消して了つたといふ記録は、右の芭蕉の考へからも、その眞実性を信じうると思ふのである（『文学』昭和廿五年六月号、拙稿「奥」同じ芭蕉の考へが反対に表現されてゐる例は、岩沼の條等に見受けられる。即ち、此の方は、武隈の松のことを「武隈の松にこそめ覺る心地はすれ」と書き出した、その辺の印象を深からしめんために、『日記』によると、その日（五月）は岩沼に泊らず、岩沼はすどほりして夕方仙台に入つてゐるのに、笠嶋と武隈とも、道順を逆に書き、泊りもしなかつた岩沼で泊つたと作爲をこらして

ゐるのである。之は、やはり、故事好きの芭蕉が武隈の松にこそ覺る心地はすれと、新たに文を書き起しかつたからだらうと思はれる。一の関に二夜も泊り乍ら、それを省略してしまつたのと、丁度逆の制作心理が見られるのである。

『細道』本文にはついで「其間廿余里ほと、おほゆ」とあつて、其間がどことどことの間か明らかでないので登米と平泉の間だとする説などもあるが、之は石巻から平泉までの距離を云つたものである。このことは實際の距離から云つてもその通りであるが、芭蕉の文章からも、この章は石の巻が主であり、登米はたゞ「心細き長沼にそふて戸伊戸と云所に一宿して」と前後つゞいてゐる文章に、一寸挿入されてゐる丈だから、文の構成上からもやはり石の巻・平泉間ととるべきであつた。

この日、五月十日は前記のごとく、永井辺から雨が降り出し、湧津辺から雨がよくなつた、め馬に乗つたが一の関にいたところは合羽もとほる程だつたといふ。大体芭蕉のこの旅の日程は五月雨のところに完全にかゝつてゐて、その事は十分出かけるまへから覺悟してゐたと思はれるが、それにしても実によく雨に降られてゐる。五月になつてから平泉まではどうかといふと、五月朔日快晴、二日快晴夕方雨夜強、三日雨、四日雨少し止、五日記録なく不明、六日良途上俄雨、七日期快晴夜雨、八日朝小雨、九日快晴、十日（石の巻）快晴夕方小雨、十一日（登米）良、十二日（一の関）強雨、十三日（一の関）良——以上の如くである。『細道』本文の次の平泉の條に、例の「五月雨の降のこ

してや光堂」の句があり、五月雨の降る中の光堂の景と従来多く考へられて来たが、『日記』によつて、その解釈は完全に否定されるのである。この十二日あたりの強雨が芭蕉の頭の中にちらつて、かうした五月雨の句が出来たものと思はれるのである。

以上で本文の考証を終るが、次に、松島から一の関・平泉へ出ようとした芭蕉のはじめの予定と関聯して、松島から石の巻に出ずに、まづすぐに平泉に出た人々のコースを考へてみようと思ふ。

享保元年、祇空が芭蕉の『細道』のあとを歩いた奥羽紀行『烏絲欄』(享保二)をみると、祇空は松島から平泉へ次の道程をとつてゐる。即ち、松島の記事のすぐあとに、

それより高木塩浜を右になし、大松沢野地あり。馬蹄あやうし。三本木、古河にとまる。なを行くて宮野、一の関にとまりさためて平泉へ行。

とある。祇空は鳴瀬川沿ひの野蒜街道まで出ずに、高木(高)城を右にみて西北二里半あまりの大松沢に出で、それから三本松を経て古川に泊り、古川からは陸羽街道を高清水・宮野・富野・沢辺を過ぎて一の関に至つたものと思はれる。次に少し時代が下つて、元文五年馬州の松島象瀉紀行たる『奥羽笠』(元文五)によると、馬州は、

まづしまを出て、坪の石ふみを見る。

碑や日さかりの楯国の楯

『奥の細道』の制作心理

猶高館平泉を見んと、七曲といふ所へ出て、よし岡の山道を過るに、何里つゝきたる時に松の茂りの綱を引たるか如し。里人のいへるはあれこそ栗原はさまの郡境にて、秀衡時代よりの松なを残りりとかや。無双の景色に笠打敷て日のたくるをもしらす。

呼ひめん奥の楯立散る松葉

古川・おたへの橋を過て、あねはの松を見る。其あとなを残りて櫃置松もいとふるひて、都のつてにと讀しもおもひ出られたり。金成の山を分て、吉次藤太か五輪を見、一の関へかかりて、山の目に宿る。明れは高館・平泉にあそぶ。

このコースは、祇空とは逆に、松島から西南に下り、坪(壺)の碑から七北田へ入り、あとは陸羽街道で、吉岡・三本木・古川と行つた西廻りのコースのものらしい。つまり東廻りの祇空のコースとは三本木で落合ふわけで、そのあとは同じ本街道を北上したのである。案するに、芭蕉は、それが一番最短で、もつとも早く陸羽街道に合流する事からも、又緒絶の楯は妹齒の松をみられる事からも祇空の通つた道を予定コースと考へてゐたのではなからうか。かう考へると、芭蕉が松島を出たとき、本当に石の巻に行く気がなかつたとすると、松島を出て全くすぐに道をまちがへてしまつた事となるのである。何らかの参考となると思はれるので氣づいたまゝ以上の事をつけ加へておきたい。

## (二)

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡へ一里こなたに有。秀衡か跡へ田野に成て、金鷄山のミ形を残す。先高館にのほれへ、北上川南部より流るゝ大河也。衣川へ和泉か城をめくりて高館の下にて大河に落入、康衡等か旧跡へ衣か関を隔て南部口をさし堅め、夷をふせくとみえたり。偕も義臣すくつて此城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵ともか夢の跡  
郊の花に兼房みゆる白髪かな

曾良

芭蕉等が平泉を訪ねたのは五月十三日である。曾良の『日記』には、その日の事を左のやうに記してゐる。

一、十三日。天氣明。巳ノ刻ヨリ平泉へ趣。山ノ目、平泉へ、  
伊達六幡一リ赤ノ奥也  
以上二里半ト云トモ二リニ近シ。高館・衣川・衣ノ関・中  
尊寺・光堂・さくら川・さくら山・秀平やしき等ヲ見  
ル。霧山見ユルト雖見ヘス。タツコクカ岩ヤヘ不行。三十町  
有由。月山・白山ヲ見ル。經堂ノ別當留主ニテ不開。金鷄山

見ル。シミン堂・无量劫院跡見。申ノ上刻歸ル。主水風呂口  
ヲシテ後宿ス。

以上の如くある。以上で大体芭蕉らの平泉一見のコースが明らかになるのであるが、この日は平泉まで僅かに二里強で往復五里足らずの距離だから、平均してみると、大体一日九里を歩いてゐる『細道』の芭蕉らの旅からみると、今日はまだこれに樂な行程である。だから朝も緩りと、「巳ノ刻」(午前)に出発し、平泉を見物して一の関に帰着したのも「申ノ上刻」(午後)であつた。大体今の東北本線に沿つた陸羽街道を北上して平泉に行つた事と思ふが、平泉では先づ高館を見た。高館は、中尊寺に至る道の東側にある老杉鬱蒼たる小丘であるが、義経が居住し文治五年泰衡に攻められて自刃した処と伝へる。この館は、『平泉古図』をみると、高館山から東に及ぶ地を占めてゐたらしく、「弁慶屋敷」や「義経從臣屋敷」は山の北側にあつたらしく思はれるが、往時と異り北上川がずつと西に流を交へ、今高館山のすぐ東麓を流れるやうになつたため、当時の旧観は失はれてゐるものゝ如くである。高館から北へ數丁で衣川に出で、衣の関(旧関をさき)も見、それから中尊寺に上り、光堂・經堂、それから中尊寺より數丁、その丘の西北麓なる和泉三郎忠衡の居館、即ち「泉が城」を見、それから櫻川(後述、曾良衣関の條参照)さくら山を眺め、秀衡屋敷を見た。泉ヶ城の西にあるといふ霧山は見えず、又平泉から西南一里半、嚴美に至る途中の「タツコクカ岩ヤ」(達谷)にはいかなかつた。『日記』に

は「三十町有由」とあるが、実際は少し道のりがある。達谷窟は當時から著名だつたと見えて、芭蕉らは行かなかつたが、桃隣(陸奥)や祇空(烏絲)や馬州(奥羽)等、多くの人々はこゝに立ち寄つてゐるやうである。それから、月山(鳥子欄に和泉が城、月山見ゆ。)と白山(吾妻鏡によると、毛越寺の中に。西の方角らしい。)・白山(日吉・祇園・稻荷等と共に。無量光院趾の西南一丁の辺。その一社を云ふのであらう。)として見て廻つてゐる。但し、別に、桃隣も白山権現も白山宮のあつた事は平泉古図にもあり、鳥子欄にも見える。こゝではどちらの白山を見、金鶏山を見、「シミン堂、无量劫院跡見」たとあるが、この「シミン堂」と書いてゐるのはおそらく高館の南五丁許りの辺にあつた秀衡建立の無量光院の別称「新御堂」の事であらう。又、曾良は「无量劫院」と書いてゐるが、普通「無量光院」と記す。秀衡の建立で、大苑池を掘り、池の北畔に阿彌陀堂を建て、宇治の平等院鳳凰堂に類似した寺であつたらしいが、天正中焼亡したと云ふ。今も苑池の址は認められ、又堂の土壇礎石が遺存してゐる。

以上の『日記』の記載を調べてみて、不審に思はれるのは毛越寺址の記事の全く見えない事である。前記、無量光院も毛越寺に属してゐたらしいが、大泉池・南大門跡のある一域のことが見えないのである。この事は『細道』本文も同様で、申合せたかの如く毛越寺・嘉祥寺(毛越寺の中堂)・円隆寺(毛越寺の金堂)等の名が全然見られないのである。たとへば『鳥子欄』などには「円

隆寺、嘉祥寺、泉水のかた斗残り」と毛越寺の辺の事を記してゐるのに、芭蕉は師弟ともに何もかいてゐないのである。

『細道』本文には「三代の栄耀一睡の中にして」と書き出して、奥州藤原氏三代、清衡・基衡・秀衡九十四年(清衡平泉に秀衡歿するまで。而して泰衡火を放ち平泉の廢墟となつたのは文治五年八月廿二日、その二年後の事である。)の栄華の夢を記してゐる。一睡の中は例の盧生の黄梁一炊の夢の故事であらうが、古く『下学集』に「一炊夢、日本俗推量、炊爲一睡、癖案也」とあつて、芭蕉のみの使ひ方でなく古くから此の字を用ひたらしい。さて、そのあと唐突に「大門の跡は一里こなたに有」とある。この大門はどういふつもりで書いたのであらう。この大門に關聯して、桃隣の平泉遊覽の記録は、芭蕉らと足取りを比較して参考になると思はれるから、左に『陸奥衛』を引用してみよう。

是より(註。金花山)右の道筋へ出、石の卷へ戻り、和沼・新田へかゝり、清水を離て、高館の大門あり。平泉ヨリ五里手前、城郭惣構なり。少行テ、一ノ関、是ヨリ高館・平泉。義経像・堂一字。弁慶櫻、中尊寺入口ニ有。龜井か松、田の中に有。北上川・衣川・衣の関・関山・金鶏山。和泉城・衣ノ関ヨリ、ハ五丁西南ニアタリ、一方は陸、三方は衣川也。弘台寿院中尊寺は東叡山末寺、当住淨心院。當時は慈覺大師開基。貞觀四年、元祿九年(註。桃隣のこゝ)マデ八百八十五年ニ成。金堂・光堂是也。三間四面、七宝莊嚴ノ卷柱、合天井、

黄金ヲ彩。獸鳥十色ヲ競、其結構言語に絶タリ。唯扉ヲ開ケバ、日月ノ光明タル計也。本尊釈迦。秀衡三代ノ廟、堂ノ下に体を納ム。経堂、本尊文珠。一切経二通、紺帯金泥。宝物、水晶ノ生玉、體ノ牙齒、秀衡太刀、義経切腹九寸五分。白山権現・薬師堂・八幡宮・姥杉十五、此外古跡多シ。中尊寺ヨリ案内なくては不レ叶。

以上の如くあり、桃隣は佐沼(和沼といふのは誤りか)から上新田へ、それから陸中花泉村の清水へ出てをり、そのあとに「高館の大門」といふものが平泉の五里手まへ(南であらう)の清水を出はづれたところにあるといつてゐる。又少し時代が下るが、宋屋が延京四年の奥羽紀行『杖の土』(宝曆五)にも「高館に着。義経の城跡、十町はかり小山、松杉生たり。高ミ也。□(蝕)屋とて小社、大門は五里手前のよし」とある。この大門も桃隣のいふのと同じものをさすらしい。之について、平泉の東南五里の金沢村の大字に大門があり、之は金沢村に葛西氏の館があつたのでその大門であつて、高館のそれではなからうとも云はれるが、しかし、これらの「大門」なるものは、『細道』のいふ如く「一里こなた」ではなかつたから里数の点ではいふかしい。一方、この金沢村の大門は土地では秀衡の居館の大門の跡とも伝へてゐる由で、芭蕉もこの地は通つてゐる(日記に加沢と書いてゐるが)ので一概に否定もしきれず、里数のちがひは、後日追懐のときの思ひちがひからとみればみられぬこともないやうである。ところで、今日の平泉で大門跡といふのは、毛越寺の南大門位しか

思ひつかれず、さうとすると藤原氏代々の本屋敷——秀衡の伽羅御所・泰衡館・柳御所など云はれるもの等——のあつた平泉館から、「一里」どころか数丁しかないところにあるのである。

そこで此の難問を解決するために、飯野教授は、当時仙台藩領内では六丁が一里だつたので、土地の人から聞くまゝにかく言つたものだといつて居られる(同氏著、前掲書及び『奥の』成程、かう解すれば合理的に考へられ、私も少し時代が下るが、巴凌・二日坊の『ミち奥日記』(宝曆五)に「仙台に泊る。壳里を六丁にさだむ」と明記してゐるのを見出したが、たゞ氣になるのは、芭蕉は『ミち奥日記』の如く、註記をせず、いきなり「一里こなたに有」と言つてゐる丈だから、そのつもりで書いたとすると、仙台一里の事を知らぬ多くの読者をまどはせるものと言ふべきであらう。なほ、この事について、彌富破摩雄氏は「奥の細道の大門の跡私故」(同氏著『近世國文』の中で、芭蕉が『細道』本文中に毛越寺の事に全然解れてゐないと、ところから、毛越寺の南大門を中尊寺の大門だと早合点したのであらうとされてゐる。別に、今日の西木戸番所址をさしてゐるのでないかとの説もあるが、番所址は毛越寺の南七丁にあり、之も一里の距離に難点があるのみならず、普通の見物人の余り訪れない辺鄙な西南隅の地にあり、その上「大門」の址といふ感はなかつたであらうと思はれて同じ難い。

この問題に関して、私は次のやうに考へてゐる。即ち、『細道』本文にも『日記』にも大泉池を中心とする毛越寺・嘉祥寺・円

隆寺・南大門址等の記事が全然ないのは、ことにあれ丈詳細に一日の行程を記録した曾良の日記にも全然触れてゐないのは、あの辺には行かなかつたのか、とも思はれるが、然し今日私達が平泉に行つてみても、あの大泉池辺の伽藍の跡をみないで来てしまふ人は殆どなからう点から考へても、芭蕉らがあの辺へ行かなかつたとは信ぜられない。芭蕉は南大門の址に立つてもあたり一面、夏草の生ひ茂つてゐるのみで大伽藍の、さびた大泉池に影うつすものもなく寂寞たる光景を眺めて、それが毛越寺の南大門たる事に気づかず、却つて平泉の昔の栄華の夢のみ胸中に去来し、光堂の壯麗に心をうたれて知らず知らずに、それが中尊寺の南大門と錯覚したのではなからうか。「三代の栄耀一睡の中にして」といふ文章は、「三代の棺を納め」、三代の栄耀の主達の睡つてゐる光堂の印象の搖曳であつて、中尊寺の光堂を頭に浮べて、そこから南大門が一里こなたに在ると言つたのではなからうか。それならば「一里」といふ里数にさう無理なく考へられる。

或ひは又思ふに、毛越寺南大門址から平泉館址まで数丁しか実際はないのに、平泉三代の栄華を文学的に誇張して、一里こなたと言つたのではないか。即ち例の作爲をこらした芭蕉の芸術化のひとつの現れなのではなからうか。或は又、桃隣や宋屋の云ふ、高館から五里こなたの金沢村の所謂大門を、里数を一里とまちがへて記したのであらうか。——之らの解釈のうち、いつれかが當つてゐるのではないかと考へてゐる。私は前者

### 『奥の細道』の制作心理

『素龍本影印、校註奥の細道』には飯野教授の説に従つて、六丁一里の謂ひであらうとし、前記『ミち奥日記』の用例をも挙げておいたのであつたが、よく考へてみると、何の予備知識もない——曾良の『日記』にも全然さうした仙台一里の註などの記載が見えない——読者に唐突に何の挨拶もなしに仙台一里をつかつた里数を記すといふのもいぶかしく思はれるので、——土地の人に聞いたまゝ記したといふのも苦しく——前註を取り消して右の考へに改めたいと思ふ。

さて、本文にかへつて、——「秀衡か跡は田野に成て、金鶴山のみ形を残す」とある。秀衡が跡は所謂伽藍御所、又御所屋敷と呼ばれてゐるところで、総称して平泉館をさして言つたものと思はれる。『平泉古図』をみると、今の平泉駅の東北四丁ばかり、東北本線と北上川との間で、此の辺が藤原氏の栄華の中心地であつた。その栄華の跡を芭蕉らは右に見て先づ高館に登つた。高館は、文治五年二月廿六日、鈴木三郎が紀州白藤の一族に与へた書に「たかたち」と仮名書のものがあり、当時さう發音してゐたかと思はれ、又この芭蕉の『細道』の旅と同年刊の大淀三千風の『日本行脚文集』にも「高館の御所の松」と振仮名してをり、三千風は永く仙台・松島辺に住んでゐた人で、此あたりに詳しい人なので、此の振仮名は信用していいのではないかと思ふ。芭蕉当時、タカダテとよんでゐたか、タカダテとよんだものか明らかでないが、三千風の振仮名は参考になると思はれる。本文のこのあとの文章は芭蕉が高館の丘に立

つて眺望しての述懐である。「衣川」については曾良の『備忘録』に「衣河。平泉村ヨリ十四五丁行、ヨ程ノ川也。土橋有。南部街道也。今ハ高館二十町程間有。古トハ川瀬チカヒシ也」とみえ、北上川と共に衣川も川筋が往昔とは変化してゐるやうである。衣川が「和泉か城」をめぐりて、とあるのは、『平泉古図』では「泉ヶ城」を衣川がぐるりと取り囲んで流れてゐるやうに画かれてをり、即ち泉ヶ城が島のやうに見えるが（『平泉名勝』に「志」には「衣川村南段に在りて、耕地となり、四方に堀跡のこれり」と云ひ、又『聞老志』にも、中尊寺の西に在りて衣川を阻つやうに書かれてゐる）、之は『陸奥衛』に「和泉城、衣ノ関ヨリハ五丁西南ニアタリ、一方ハ陸、三方ハ衣川也」と書かれてゐるのが元祿当時の実景であらう。三方が川になり、つまり東流して来た衣川が和泉ヶ城のところできつと北西に彎曲して今度は東南流するので、さうした実景を「めぐりて」と芭蕉は書いたのである。「康衡等か旧跡」といふのは、『平泉古図』に秀衡の伽羅御所の南隣りに泰衡の館が描かれてをり、それを主に考へてひろく平泉館全体を指して云つたものと思ふ。次にその「旧跡」が「衣か関を隔て南部口をさし堅め」とある、その衣か関は、平泉の東北方長根の鉄道・国道の狭く通つてゐる辺の、所謂白鳥の新関（奥州高館）等（沿革志）等をさすのではなく、高館のすぐ下の旧関をさして云つたものである。こゝは従来、芭蕉が新関を指して云つたのか旧関をさして云つたのか、疑問のあつたところであるが、曾良の『備忘録』には、はつきりと、「衣関、高館ノ後、切通シノヤウナル有リ。是也。

南部街道也。ソバノ小キ土橋ヲ櫻川ト云」と書かれてゐて、古関址をさす事が明らかになつたのである。『聞老志』も、高館を去る一町余、山下に小関路あり、是れ古関門の址也と云つてゐる通りである。私の今みてゐる従来の註釈は多く、この衣か関を新関とつてゐるが、之ははつきりと訂正さるべきだと思ふ。「康衡等が旧跡」と芭蕉が複数にしたのは、『平泉古図』に見える如く、秀衡の伽羅御所、其の南の泰衡館・高館の東の二之丸・柳御所等、総称しての平泉館がみな旧関の南にあつたからで、それが「衣か関を隔て」南部口をさし堅めて夷をふせぐと見えたのである。樋口功氏の『奥の細道評釈』は、「康衡等が旧跡」は平泉館附近を指すのでなからうとして居られるが、他に泰衡館の位置についての伝承はないやうであるから、以上の私の解釈でよからうと考へる。実際、高館の丘上に立つて眺望してみても、白鳥の方の新関とみると余りに遠すぎるし、こゝの処の芭蕉の筆致は、四周をぐるりと眺望しつゝ述懐してゐるので、東の方から「北上川南部より流るゝ大河也」と云ひ、ついで北へ眼を転じて「衣川は和泉か城をめぐりて高館の下にて大河に落入」と述べ、更に西へ眼をうつして眼下の古関址から南の泰衡館等の旧跡を眺めて「康衡等の旧跡は衣か関を隔て」と書いたのである。之を新関とすると、四周眺望の最後に又東北はるか彼方を云ふ事により自然ではない。いづれにしても曾良の『備忘録』が出現してみると、それが古関址を指してゐる事はもはや明瞭だと思ふ。

本文の「偕も義臣すくつて此城にこもり功名一時の叢となる」云々の「義臣」を、高館丈の事を云ふのでなく、所謂三代の遺跡を引括めて云つたので、義臣は特に義経の臣下だけに限らぬといふ説があるが(樋口功氏)、こゝは高館の丘に立つての述懐であり、次の曾良の兼房の句の置き方などからみても、やはり義経の臣丈をさしたものと考ふべきである。それ故、「此城」は勿論高館をさす。「国破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打敷て」といふ描写は、例の杜甫の春望の詩、「国破山河在、城春草木深」を踏んでゐる事は云ふまでもないが、今は春ではなく五月雨の晴れ間の夏の日だのに、さうした事はおかまひなく、芭蕉は城春にして、とそのまま記し、たゞ草木深しを、草青みたりと眼前の敘景に翻してゐるのである。草青みたりの一語のおきかへで、杜甫のやゝ観念的な詠歎が、おどろく程新鮮に印象づよくなり、長雨の晴れ上つた小丘の夏草を、そのむつとする草いきれと共に眼前に髣髴せしめるのである。「笠打敷て」といふ言葉は、今日は晴れてゐるものゝ、前日の「強雨」(日記)のあと、まだすつきり乾ききつてゐない夏草の上におかには坐れず、笠の上に坐した芭蕉の實際の姿を不図洩らしたものであらう。と共に、以下の悲痛な詠歎を、「笠打敷て」といふきびきびした表現でもつて緊密にしてゐる、文学的効果があるやうである。

次の芭蕉と曾良の二句は無論高館での感懐である。彌富氏等は之を、毛越寺の南大門あとでの述懐とみて居られるが、さう

### 『奥の細道』の制作心理

ではなからう。さて「夏草や兵ともか夢の跡」——この句は『猿蓑』にも「奥州高館にて」と前書して此の通りの句形で出てゐるが、『生駒堂』(元禄三)、『渡し船』(元禄四)及び『泊船集』(元禄十一年刊)等には中七「兵どもの」となつて居る。又『白馬』(元禄十一年刊)には「さてもそのうち、御さうしは十五と申はるの比、鞍馬の寺を忍び出、あつまくたりの旅衣、はるけき四国西国も、此高館の土となりて、申はかりはなみたなりけり」といふ詞書がついてゐて、中七『細道』『猿蓑』のまゝ「兵共か」となつて出てゐる。この詞書は『十二段草子』の古い絵巻に同じ文句が見えるが、之はたとへば「観音のいらかみやりつ花の雲」の前書に謡曲『西行櫻』の一節をつけた眞蹟があり、又同じ謡曲をつけた「木のもとにしるも贈も櫻かな」の句の眞蹟や、「たひ人とわか名よはれんはつしくれ」の句に謡曲『梅枝』の一節を附した眞蹟があり、かうした例の他に見らるゝ如く、おそらく芭蕉自身、が人に書き与へたものに、興じて『十二段草子』の一部を詞書のやうに附したものと思はれ、『白馬』の撰者が勝手にさかしらをして書き加へたものではないと信ずる。若し、しかりとすると、——多分さうだと信ずるが——この「兵共」が義経の家臣達丈でなく、平泉滅亡のときの藤原氏の家来たちをもさすといふ一部の見方は誤りとすべきで、芭蕉の頭の中には義経主従の悲しい最後のみが去来して此の句のモチーフとなつたと考ふべきである。

さて、芭蕉の登つたときの高館はどういふ様子であつたらうか。芭蕉の歩いたときから二十九年後に当る享保四年の自序のある例の佐久間義和の『奥羽観蹟聞老志』には、

衣河館高館。今日二。在三平泉村東一。阿部順時所築。曰二之衣河館一。文治中、民部少輔基成居二此館一。義経自殺干茲一。世

称二高館一是也。上有二義経古墳一。墳畔有二一櫻樹一。今猶存焉。乃往時之旧物也。傍有二兼房墓一。天和中、我前太守綱村君建二詞堂一、祭二義経迷魂一。

とあり、芭蕉の登つたときには、既に天和年間に伊達綱村の建てた義経堂が丘上にあつた筈である。又、義経堂の西南、高館の中腹なる数基の古碑は、兼房等の墓と伝へ、高館の西北、平地には義経従者の生害地、若くは墓所の標となるものを存してゐる(奥州高館)。又別に相原友直の『平泉旧蹟志』によると、高館の西北二丁余の中尊寺山下の田の中に、古墳と松とがあつて、古墳を義経の巨龜井六郎重清の塚といひ、松を龜井松と云ふこと、又龜井松の近くに増尾十郎権頭兼房の石塔があり、高さ三尺余、広さ壹尺余、昔は文字も分つたかも知れぬが、今は見えない、右の二ヶ所は生害した所とも墳墓とも云つてゐること、赤堂跡の北、街道に近い所に鈴木三郎重家の塚とも生害の所とも云ふ伝説地のあること、衣川の北上川に落ちるあたりの、中の瀬といふ地点を俗に弁慶立往生の瀬と伝へてゐること、——これらの記事が見える。而して、之等の伝説の一部は桃隣以下の諸家の紀行に屢々みえてゐる。又別に『沿革志』によると、大

槻清臣が左の如く言つてゐる由である。

按ずるに、増尾の十郎は義経の乳父にして、義経滅亡の時、自害せしなり。高館の中段に墓ありと、元祿の頃、撰せし封内名所記、並に我祖君の西縣旧跡志にも見えたり。中尊寺山下の石塔も兼房のといへば、何れか是なる乎。

芭蕉と曾良は、恐らく高館中段の数基の古碑の中の一を兼房の墓と聞いたのであらう。二人は雨後の夏草の丘に立つて『義経記』などの哀史を思ひ浮べ、もの古りて苔むした古碑を眺めて、往時と現実との夢寐の裡にある思ひがしたことであらう。

さういふイメージを芭蕉は茫漠と大きく詠歎して「兵共が夢の跡」とうたひ出し、曾良はそのイメージの心頭小景を、師翁の句に寄り添ふ如く描き出したのである。「夏草や」の蕉句と「刈の花に」の曾良句とは、萩原井泉水氏が『奥の細道評論』に云はれるやうに、恰も発句と脇句との関係の如く並べられてゐるのである。私も先年芭蕉と同じ梅雨の晴れ間の夏のある日、高館に登つたことがある。夏草の生ひ茂つた小丘の古戰場にのぼれば、なやましげな粟の花の匂ひが、雑草の草いきれのなかに何処からともむつと匂つて来るのであつた。芭蕉の「夏草や」の句は「先高館にのほれば」以下の文章と密接に結合してゐる。謂はゞ長歌と反歌のやうな関係である。人々はこの発句を発句単独でよむより『細道』本文中において眺めるとき、はるかにすぐれた芸術的興奮を感ずるであらう。芭蕉は緊密な文章で述べて来た高館の述懐を「夏草や」といふひとつの季語で

ひきしめ、一焦点を合せて作品に結晶せしめたのである。義経らが亡じたのは文治五年閏四月三十日であるから、大体芭蕉らのこゝを訪れた五月の十三日(この元祿二年も一)と相似た山野の相の中で戦さがおこなはれた事であらう。夏草に笠打敷いてあたりを見廻せば、昨日の強雨にみどりやを増したかみえる雑草の裡に、往昔この丘に戦つた「義臣」たちの姿が髣髴するのであつた。「義臣すぐつて此城にこもり」と言つても、其の数は決して多くはなかつたやうだが、永年義経と辛苦を共にした弁慶以下の著名な勇士たちが、こゝを最後と奮戦したのであつた。しかし武運つたなく一敗地にまみれては「功名一時の叢とな」つてしまつた。憶へばすべて是夢幻のごとく、往時茫茫としてたゞ夢の如しと、「時のうつるまで泪を落して」感慨にふけるのであつた。

曾良の「卯の花に兼房見ゆる白毛かな」の句は、『細道』の白川の関の條に出た、同じ曾良の「卯の花をかさしに関の晴衣かな」の句と甚だよく似た発想である。白川の関では竹田大夫国行を思ひ浮べ、こゝ高館では兼房と回想し、いづれもさうした懐古の情をイメエヂして句をつくり上げてゐる。曾良が如く、花に兼房の白髪を連想したのは、おそらく『義経記』巻七ノ一、判官北国落の事、の條に

さる程に、二月二日まだ夜深に、今出川を出でんとし給ふに、西の妻戸に人の音しける、如何なる者なるらんと御覽すれば、北の方の御傳、十郎権頭兼房、白き直垂に襦の袴著て、

### 『奥の細道』の制作心理

白髪交りの、鬢引乱し、頭巾打著、年寄り候とも、是非とも御供申し候はんとて参りたり。北の方、妻子をば誰に預け置きて参るべきと宣へば、相伝の御主を妻子に思ひ代へ参らすべきか、と申しも敢へず、涙に咽びけり。六十三になりけるまゝに、よき丈な山伏にてぞありける。云々

とある描写が曾良の頭にあつたのであらう。兼房は右にも一寸見える通り、もと久我時忠の臣で、その女が義経の室となる時、従つて義経の臣となつた人である。『義経記』巻八ノ六、判官御自害の事、及び次の七の兼房が最後の事の條に、その奮戦の姿が生々と描かれてゐる。高館最後の日、泣く泣く北の方や若君を刀にかけ、義経の自害を見届けた後、館に火を放ち、長崎次郎を小脇に搦袂み、死出の山路の供をせよと叫びつゝ炎の中に飛び込んだのであつた。この句に於ける曾良の制作心理を考へてみると、以上の『義経記』の描写が作者の頭にあり、そして現実には眼前には白い卯の花が夏山に咲き乱れてゐる、寂寞と物音もしい丘上に坐して瞑想すると、目前の卯の花の中に白髪頭の兼房の勇戦するさまが白昼夢となつてあらはれて来るのであつた。卯の花に白髪の兼房の佛を思ひ浮べたのは、旧註多く『無名抄』上の源俊賴の「卯の花のみな白髪とも見ゆるかなしづが垣根もとしよりにけり」を踏むといふが、そこまで詮索しなくても良いと思ふ。たゞ、この句を單獨にとり出してそれ自体として鑑賞しようとする時、卯の花と白髪はつきずぎてゐて、やゝ理に墮つる感がなくもない。しかし、『細道』

本文中のこの位置にこの句を置いて前文及び「夏草や」の蕉句につゞいて之を眺めるとき、前からの縹渺たる夢幻的な雰囲気がかゝる一句として象徴昇化した思ひがする。芭蕉はその象徴的なファンタスティックな味ひをよるこんでこゝに採用したのではなからうかと思ふ。

## (三)

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂ハ三將の像をのこし、光堂ハ三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて珠の扉風にやふれ、金の柱、霜雪に朽て、既頽廢空虚の叢と成へきを、四面新に囲て墓を覆て風雨を凌、暫時千歳の記念とへなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

芭蕉は右の本文に於いて「二堂開帳す」と言つてゐるが、曾良の『日記』をみると、前記の如く、「経堂ノ別当留主ニテ不開」とあり、経堂の方は拜観出来なかつたのである。さればこそ、文殊菩薩・優闍大王・善哉童子の三像をまつる経堂を、「三將の像をのこし」など、誤記して、——この三像は三代にかたどつてつくつたといふ俗説があるとか云ふが、それを芭蕉がきゝかぢりのまゝ書いたのかも知れないけれど——忽ちに馬

脚を現したのである。見もしなかつた経堂を、見て来たやうに書いてゐる芭蕉の制作心理は、懐古癖のつよい芭蕉として、はるばるこゝまで来て経堂をみられなかつた事はいかにも残念だつたであらうし、何より中尊寺の莊嚴をにぎやかに書きたかつたのであらう。それに、光堂はみなければども経堂は見なかつた、では文章としてもひどくぶちこわしであるから、かく虚構したものかと思はれる。

光堂の三代の棺を納めてゐる事は、最近のミイラの調査で有名となつたが、古くからその事は伝へられてゐたのであつた。さて、「光堂」はヒカリダウとよむのか、ヒカルダウとよむのか問題であり、樋口功氏などは「ヒカリダウでなくてヒカルダウと訓むのであらう」(評)と言つて居られるが、之は此の紀行より早い天和三年刊の蕉門其角の『虚栗』に「光堂むかしの夕べさやかに」といふ振仮名のついた才磨の句が見え、又『細道』の旅と同年、元禄二年刊の前引、三千風の『日本行脚文集』にも「一字の光堂残れり」と言ひ、同じく同年の西鶴の『一目玉鉢』にも光堂とし、少し時代のおくれる宋屋の『杖の土』(宝元五年)にも「光り堂開帳」と書かれ、又馬州の『奥羽笠』(元文五年)刊にも「光り堂」とある。なほ摺搜すればいくつも見つかると思ふが、以上の資料によつても当時ヒカリダウと云つてゐたとすべきであらう。三代の棺を納めてゐることの記述は、前引『陸奥函』に「秀衡三代ノ廟、堂ノ下ニ体を納む」と云ひ、『行脚文集』にも「此香花の壇下、石簀の中に清衡・基衡・

秀衡三將、頭北面西の夜台、佳名不変の御靈室也」とあり、又『烏絲欄』にも「秀衡三代の石の棺を納む」と見え、更に『杖の土』にも「秀衡三代の棺を納む」とあり、種々なものに出てゐるのである。

次の「金の柱、霜雪に朽て」の朽の字は、曾良自筆本には、初め権と書き、のち朽とあらためてゐる。「くだけで」では少し言葉がつよすぎるので「朽て」と再考したものであらう。更に、「四面新に困て藁を覆て風雨を凌、暫時千歳の記念と」なつたと云ふ書き方は、何か近頃さうした事が出来たかの如き言ひ方であるが、光堂に覆ひの茨堂の出来たのは元祿二年より四百一年も昔のことである。又、暫時千歳の記念となる、といふ言葉は、言葉自体矛盾したやうな印象を与えるが、この「しばし」は「わりなし」等いふ言葉と同じく芭蕉の好んでつかつた語で、かの『幻住庵記』にも「暫く生涯のはかりことゝさへなれば」等と見え、考へてみれば芭蕉自身の仏教的人生観を示すものであつた。それは、『細道』冒頭のかの「月日は百代の過客」だとし、人生を夢幻と観ずる流転の思ひのこもつた觀念の表現と思はれる。なほ「新に困て」については、之は茨堂の出来た鎌倉時代の正応元年のことをさすのでなく、其の後も茨堂の修復のこともあつて、——寛永年間の修理の記録もあり——芭蕉の見た近い時代にその修理が行はれて新しく見えてゐた、といふやうな事情があつたのかも知れない。

さて、「五月雨の降のこしてや光堂」の句の芭蕉の制作心理

はどういふものであらうか。この發句は『奥の細道』に書きとめられたまゝ芭蕉の生前にはひろく世間に發表されなかつた句である。『猿蓑』をはじめ、生前の集には全く出てゐないもので、同じ平泉での二句のうち「夏草や」の句の方は『猿蓑』に自ら出句し乍ら、この句はあへて發表しなかつたところに、芭蕉の此の自句に対する評価が偲はれると思ふ。この句は「夏草や」のやうに、その時の感懐が素直に流露してうまく作品に結晶してくれたといふ風な作柄でなく、卒直に申せば、いろいろ考へ考へした挙句、こね廻しすぎて失敗した作だと思ふのである。芭蕉の未定稿を臨写して決定稿で横に訂正した曾良の自筆本『細道』には、

五月雨や年／＼降て五百たひ

螢火の屋は消つゝ柱かな

の二句をこの場所に記し、右の一句目の「降て」を「降も」と改め、更に之を「五月雨の降残してや光堂」とすつかり改変して推敲してゐる。そして二句目の方の句は墨の縦棒で全然消してしまつてゐる。「五月雨」の句について、今眼前に五月雨が降つてゐて、その雨の降りこめた、辺り一面暗い中に、此光堂だけが光り輝いてゐる、丁度こゝ丈は五月雨が降り残したのであらうか、といふ風に解釈がある。しかし、光堂の外から見えないのは茨堂で別に光堂の名の通り外観が光り輝いてゐるわけではない。それに曾良の『日記』によると、此の日は天氣がよくて五月雨は降つてゐないのである。もつとも此の方は、その日、

終日曇りであつた日光山で「あらたうと青葉若葉の日の光」の句をつくつてゐる芭蕉だから、日を照らせたり曇らせたり、雨を降らせたりやませたりする位は自由自在だと云はれるかも知れない。しかし曾良自筆の臨写本が出て来て、従来、筆写の時代のおそい、河西本の本文として、疑問視され重視されてゐなかつた右の異同が、そのまゝ芭蕉の推敲過程を示すものだとすると、この場合大切な考察資料となつてくるのである。而して曾良自筆本によつて、「五月雨の降残してや」といふのは、作者眼前の囑目を述べたものでなく、中七「年／＼降て」又は「降も」とあるごとく永い過去の時間的経過を云ふ言葉であつた事が分つたのである。即ち、古い歴史のある中尊寺も大方は「既に頽廃空虚の叢と成」つてゐるのに、この光堂のみがかうして今まで立派に存在してゐるのは、幾百年の間の五月雨もこゝだけは降り残して来たのであらうか、といふのである。『細道』本文の前文によつて光堂の過去からの来歴を述べて来た、すぐそのあとに記されてゐる句だから、「降残してや」はやはり当然、懐古的な気持の尾をひいてをり、さうした感慨の詠歎である筈であり、さればこそ右の如く解すべきものであつた。芭蕉はこゝで写生句をつくつたのではなく、観想的な句を成したのであつた。莢堂の中の光堂の莊嚴な美しさにうたれた芭蕉は、その深い印象を何とか一句にまとめたと思つた。そのとき、今日は晴れてゐるものゝ道中度々悩まされて来た五月雨、殊には昨日は「合羽モトホルホド」の雨に苦しめられたのであつた

が——一句の季語として「五月雨」の語が不図彼の頭に思ひ浮んだのはきわめて自然であり、早速彼は、「五月雨や年／＼降て五百度」とおいてみた。光堂が天仁二年藤原基衡に建立されたと云ふ伝承を信ずると、ことし元祿二年は五百八十年目に当る。けれど、大ざつぱに五百度と言つたのであらう。中七の「降て」を「降も」に改めてみたのは、「降て」と云ふ表現の余情なきをそれて改めたのであらう。しかし、かく推敲してみても芭蕉は満足出来なかつた。不満のひとつは、「五月雨や年／＼降も五百たひ」——之では一句としての独立性もない。前文にもたれすぎてをり、前文がなければ光堂のことを詠んだとは人には分らないのである。かうして考へ直され、決定句と推敲された。こゝに至つてはじめて、五百度も年々降つた五月雨にも朽ちず亡びず、さびたりとは云へ金色莊嚴たる光堂のめでたさを、それから受けた自らの感動を、先づ先づ十分に一句に表現しえたのである。しかし、かく改めてみて、格段によくなつたとは言ひ條、「降残してや」の中七に、何となく初案からついてまわつた理窟つばい、すつきりしない匂ひが残存してゐるやうに感ぜられるのである。芭蕉が自ら「猿蓑」に「夏草や」の句を入れ、この「五月雨の」の句を捨てた氣持が分るやうに思はれる。一方、芭蕉のすてゝしまつた「螢火の昼は消つゝ柱かな」の句は、うすぐらい光堂の、七宝をもつて莊嚴した古びた柱に可憐な昼の螢を見出して、それを目にとめての作かと思はれるが、之も芭蕉の感動がはつきり読者に伝はつて来

ず、一句の独立性も甚だおぼつかないのである。光堂の螢は、三千風に「月花螢二や三ひらの光堂」と詠まれ、又『陸奥衛』の桃隣「軍せん力も見えず飛はたる」の句も平泉の螢であつた。光堂の柱にひるの螢のあはれきを見出でた芭蕉の、詩人としての眼は、いかにもこまやかにつかしく、芭蕉らしいほそい神経が感ぜられるのであるが、遂に一句として自ら満足出来る作品には結晶しなかつた。「降残してや光堂」の句の推敲が成つてよしとすると、芭蕉は惜しげもなく螢の句をすてしまつたのであつた。芭蕉は平泉でうけた深い感動を、高館と中尊寺との二つのやまに分け、その一つづつの文章のあとに一句づゝ句をおいてみたのであつた。芭蕉以後の文人、殊に俳人は芭蕉の跡を慕つて多く平泉を訪ねたが、芭蕉以前には三千風等の他、余りこゝを訪ねた人はきかぬやうである。松島・象瀉を旅の目的としてゐた芭蕉がわざ／＼廻り道をして平泉へ行つたのは、判官びいきの気持や、平泉の藤原文化へのあこがれなどもあつたらうが、一方彼の古くから最も私淑し愛読してゐた西行が行つてゐることに心ひかれての事であらう。芭蕉が『山家集』を日頃愛誦してゐたことは、親友山口素堂が『甲子吟行』序に「此翁年ころ山家集をしたひて、をのつから粉骨のさも似たるをもつて、とりわき心とまりぬ」といひ、又彼の芭蕉追悼吟「あはれさやしぐるゝ頃の山家集」に、素堂が「亡友芭蕉居士近來山家集の風体をしたはれければ、追悼に此の集を誦誦するものならし」と前書してゐる事からも知られ、芭蕉作品への

西行の影響は枚挙に遑がないが、その『山家集』に西行の平泉での詠が見られるのである。芭蕉をしてはるばる平泉一見の志をいだかしめたものゝひとつに、西行の影が色濃く思ひ出されるのである。

#### (四)

南部道遙にミやりて、岩手の里に泊る。小黒崎・ミツの小嶋を過て、なるこの湯より尿前の関にかゝりて、出羽の国に越んとす。此路旅人稀なる所なれば、関守にあやしめられて、漸として関をこす。大山をのぼつて、日既暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

芭蕉等は、五月十三日は平泉の見物を終へて一の関に引返し、口碑によれば同じ地主町の金森利平方に泊つた。前述のごとく二夜庵の号を今に伝へてゐるのは、芭蕉が平泉への往復に二泊したからの謂ひである。二人は翌十四日、一の関を発つた。この日のことは、『細道』本文には、たゞ「南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る」と簡単に二行で片づけてゐる。芭蕉の右の一文は、奥州街道を北に入ること、平泉をとりとして、そ



を経て岩出山に至るやうだと云はれ、实地踏査の上、旧街道に松並木の切株の存在もたしかめられて、此の道だらうと云つて居られる。今『日記』をみると、正しく氏の推定は美事に適中して、芭蕉はこの岩出山街道を歩いたのであつた。全コースで十里以上あり、それ丈でも強行軍であるから、つくも橋や金成へは寄りなかつたとみるべきであらう。

この日は右のやうに宿泊地の名をしるす丈で記事がなく、翌五月十五日はどうしたかと云ふと、十五日の『日記』——この日の日記は十四日の記事の後半と混雜してゐて分りにくいが——

ニ中新田町、小野田仙台が最上へ、原ノ町、門沢関所、漆沢、  
輕井沢、上ノ畑、野辺沢、尾羽根沢、大石田船、岩手山が門、  
道も有之。右ノ道遠ク難乗、沢迄、すく  
所有之由故、道ヲカヘテ  
十五日。小雨。此道ハ眞ニ寄半、此宿へ出タル各別近シ。  
坂ノ小藏ト云カ、リテ

宮〇かちハ沢、  
名生貞ト云村ヲ黑崎ト所ノ者云也。其南ノ山ヲ黑崎山ト云。  
名生貞ノ前ノ川中ニ、岩嶋ニ松三本、其外小木生テ有。水ノ  
小嶋也。何ハ川原向付タル也。古ハ川中也。宮・一ツ粟ノ  
間、古へハ入江シテ玉造江成ト云。今田畑成也。  
寄半、  
尿前シトマへ、取付、左ノ方川向ニ嶋子ノ湯有。  
沢子ノ御湯成ト云。仙台ノ説也。

奥の『細道』の制作心理

壱リ半 村山郡小田島庄小國ノ内。  
中山 〇堺田 出羽新庄領也。中山ノ入口五六丁先ニ  
堺枕有。

此日記の前の部分に、尾羽根沢(註。尾)・大石田で船に乗るやうに書いて、道順を列挙してゐるのは、芭蕉等の実際には行かなかつた別の尾花沢への道を記してゐるのである。即ち、実際には、二人は岩出川から西北へと、一票・名生定・嶋子・中山を越えて、山形縣最上郡の堺田へ出る。北羽前街道を行つたのであるが、こゝに記されてゐるのは、岩出山から反対に羽後街道を南下して、中新田に出て、それから中羽前街道を小野田・門沢・漆沢へと西進して歩き、そこから今の街道は鍋越越をするのだが、曾良の書いてゐるのは、一里半南の輕井沢越をして國境をすぎ、上野畑(日記には)・延沢(日記には)を経て尾花沢に出る、その道を記してゐるのである。しかし此の道は、『日記』の次に記すやうに、岩出山から中新田を経て、門沢へ出る三角形の二辺を歩く道の他、「岩手山が門沢迄、すく道も有之」、三角形の二辺を山越えにゆく近道もあるのだけれども、この輕井沢越は「右ノ道遠ク、難所有之」よしなので、二人は「道ヲカヘテ」嶋子經由の北羽前街道を行く事にしたのである。芭蕉等と同じコースを尾花沢へ出た桃隣は「警提山」から、此所より下宮と云村へ出る。さきは鍛冶屋沢(註。日記に、はこゝ)・此間ニ小黒崎・水のをしまアリ。是ヨリ嶋子の湯泉、前ニ大川綱渡し、彼十つなの流し是成やと、農夫にと

へどもしらず。川向ニ尿前と云村アリ。則しとまへの関とて、きびしく守ル。(陸奥)

と書いてゐる。小黒崎・みつの小嶋は右に引いた『日記』に詳しい地理的説明が見えるが、例の『古今集』の東歌「をぐる崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを」の歌を芭蕉は念頭においてこの辺の文章を書いた事であらう。芭蕉は尿前の関を「此路旅人稀なる所なれば関守にあやしめられて漸として関をこす」と書いてをり——関守の名は代々、遊佐甚兵衛と呼ぶ由(萩原井泉水氏)——曾良の『日記』や右の桃隣(陸奥)の記も同じ事が書かれてゐるが、この道は後に『陸奥衝』をひくやうに、宿舎はもとより食料もあやしく余り旅人の通りぬ道だつたと見える。たとへば『烏子欄』なども、この芭蕉らの道は通らず、前記の如き軽井沢越をしてゐるのである。即ち、同書に「南部道見やり、尿戸前の関へ行、出羽へこす道あり。險難かた、ふやうの所、かたく行ましき道なり。小黒崎・美豆の小嶋を見のこし、一の関より又古河迄とつてかへし、軽井沢通といふ、これよき行程二十里斗ゆく。番所あり。宿のあるしことハりて過る」と云ひ、それから上の畑より延沢を経て、尾花沢へ出てゐる。因みに、『烏子欄』によると、祇空も亦尾花沢では清風宅を訪れたが予期に反した冷遇を受けたりしい。——「尾花沢鈴、木清風といふものは、旅の哀もしり、我宿にしてねまるといひしもあれへと尋しに、今は俳諧をやめ、又江戸より一封もしる人さたかならずと、むけなる返事にて一宿をゆる

さゝりけり」と恨みを書きとめてゐるのである。

さて、『細道』本文に、「大山をのほつて日既暮ければ、封人(注)の家を見かけてを求む」とあるが、この「大山」は尿前と中山との間の中山越をさすらしく、そこで日がくれたので、山を越して一里さきの堺田で泊つたわけである(泊つた家は『日新右衛門兄とあり、『奥細道通解追加』。記』に和泉、庄には「境目の役人、境田和泉」とある)。芭蕉はそこで「三日風雨あれて、よしなき山中に逗留」したと書いてゐるが、着いた十五日は『日記』によると「小雨」、ついで『日記』に、

○十六日、堺田ニ滞留。大雨宿 和泉庄や新右衛門兄也。

○十七日、快晴。堺田ヲ立。

とあつて、翌十六日丈大雨で、その翌々十七日は快晴で出発してゐるから、「三日」といふのは足かけ三日で、実は風雨にとどめられたのは、正味は一日丈、着いた日を入れて二日なのである。こゝらにも芭蕉の制作心理上、例の旅の心細さを云ふ誇張があるやうである。なほ、このまへの條、素體本には「舍を求む」の「舍」の字が「食」とよめさうな字体でまぎらばしいが、曾良自筆本は明瞭に「舍り」と「り」の送り仮名までつけて書いてゐる。

次の「蚤虱馬の尿する枕もと」の蕉句の中七は、いかゞよむべきか。之は従来、尿前の関の「尿」の語の縁にもひかれて「馬のシトする」とよんで来たやうである。ところが私のまへから疑問に思つてゐたことは、この句、『細道』の板本の出で、『細道』が世間に発表された元禄十五年よりまへの此の句の所

出は——僅か下の二集にしか見えないのだが——元禄十一年刊の『泊船集』も、同十二年刊の『今日の昔』も共に「蚤虱馬の(マ)ばりこくまくらもと」となつてゐる事である。之は他のいくつかの例と同じく成稿まへの『細道』の句形が洩れて之らの集に發表されたものと思はれ、未定稿にはおそらく「ばりこく」と何か露悪的な鄙びた句ひのつよい句形だつたものと思はれる。そして今、右の曾良自筆本をみると、之には明らかに「尿する」と振仮名がついてゐるのである。之は芭蕉自身が自らの草稿に振仮名してゐたのか、又は曾良がつけたのか、そのところは明らかでないが、とにかく曾良はバリすると讀んでゐた事が知られ、我々も曾良のよみに従ふのが作者の氣持にちかひのでないかと思ふのである。殊に、シトは古語であり、謂はゞ連歌的用語であるから、俳諧としてはバリとよむ方が良いのではなからうか。尿前の地名のをかしさをかねて興じてゐると云ふ見方も、別に文章の表面にあらはれてをらず、殊に二人は尿前に泊つたのでなく堺田に泊つたしするのであるから、そこまで感情移入する必要はないと思ふ。

この句は蚤が夏の季語である。虱の方は「夏衣いまだ虱をとりつくさず」と『甲子吟行』の翁の句にある通り、季がないのであるが——花見虱といふ言葉は古くからあるが——蚤の方は『滑稽雑談』に「此者(註)は古風には季に不用也。当世夏とす」と云ふやうに、昔は季に入つてゐなかつた。たとへば古く寛永十八年板『俳諧初学抄』、慶安九年板『山の井』や明暦二

『奥の細道』の制作心理

年板『玉海集』などには季に入つてゐないのであるが、その寛永と慶安の中間の正保二年板『毛吹草』には夏の季に入つてゐるといふ風で、貞門時代の中頃の、進歩的な松江重頼の『毛吹草』あたりから、蚤も一部に季の詞と認められたのかと思ふ。しかしその実作は余り多くはなかつた。いづれにしても元禄頃は既に十分季と認められて世間に通用してゐたらしく、翁の句も今一句、「延宝四辰のとし故郷に歸るとて」といふ前書のある「山の姿蚤が茶臼の覆ひかな」(餓龍賦には、上五)の句が『芭蕉翁全伝』や『芭蕉句選拾遺』に見えるのである。この句など延宝四年の作とすれば、『俳諧洗濯物』、『俳諧雜巾』、『江戸弁慶』等所出の蚤の句と共に、蚤が季語として句に作られた早い時代の作と云へようか。元禄当時の芭蕉以外の人々には、

例の、有名な其角の「きられたる夢はまことか蚤の跡(花)や、  
丈草の「隙あくや蚤の出て行耳の穴」(猿)等の他、「こゝもはやなれていく日ぞ蚤虱」(山中入湯)と前書  
間に出てや蚤も桂馬飛び(有惟然坊句集)の惟然、「板の  
ゝ衣がへ」(五老井)の許六等の蕉門連や、「蚤狩に賤が朝戸は暮にけり」(宮草)の来山の句等あつて、追々蚤を季語にした句例が増加してゆくのである。

芭蕉はさきに飯塚の貧家に泊り、「土座に蓆を敷て」臥したところ、「蚤蚊にせゝられて眠ら」なかつたと『細道』に書いてゐるが、堺田では土地が高くて蚊が居ないので知らぬが、今

度は「蚤虱」に苦しめられたのである。蚤虱にせゝられてねむれぬところへ、同じ屋根の下のすぐ近くで（東北の農家では、中に飼つてゐる馬の尿するすさまじい音を耳にしては、自ら求めて出た旅ではあるが、病身の芭蕉には余程こたへた事と思はれる。しかし彼はその旅の侘びしさに浸り乍らも、同時にさうした侘しさにある自己を客観しては、何となく独り微笑されるのであつた。私は俳諧・俳句の本質は、それが対象に直接にぶつかり、真情流露して詠歎するものでなく、対象に対して「斜に構へる」姿勢から来るものだと思へるものであるが、この句なども、侘びしい旅にゐて困却しきつてゐる自己を、風狂者として客観的に眺めて、それにうち興じてゐる気分がどこかに見られるのである。さういふ態度はまゝ鑑賞者に嫌味を感じしめることがあるものだが、この句などはさうした嫌味は全然なく、ふと心に浮んだやゝユーモラスな気分を、そのまま即興的に句に仕立て上げたもので、云はゞ軽い意味でうち興じてこゝに書きつけたのであらうと思ふ。芭蕉はこの後、出羽の国を越えて尾花沢に入つたとき、その地で清風らと「すゞしさを我やどにしてねまる也」の蕉句を立句として歌仙一卷を巻いてゐるが、その中に「うまとむる関の小家もあはれ也」といふ附句を出してゐる。芭蕉の制作心理の中に、おそろく、この宿の風景が思ひ浮んだことと思はれる。

## (五)

あるしの云。是より出羽の国に大山を隔て、道さたかならされへ、道しるへの人を頼て越へきよしを申。さらへと云て、人を頼侍れへ、究竟の若者反脇指をよこたえ、檜の杖を携て、我々か先に立て行。けふこそ必あやうきめにもあふへき日なれと、辛き思ひをなして後について行。あるしの言にたかへず、高山森々として一鳥声きかず、木の下闇茂りあひて夜る行かことし。雲端につちふる心地して、篠汗を流して、最上の庄に出つ。かの案内せしおのこの云やう、此みち必不用の事有。恙なうをくりまいらせて仕合したりと、よろこひてわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのミ也。

こゝに芭蕉が「是より出羽の国に大山を隔て云々」と言つてゐるのは事実とちがふやうである。飯野哲二氏は前掲書に於いて、元禄十二年の仙台藩領内絵図、正保二年及び元禄十三年の新庄藩領内絵図、及び正保二年の両藩国境協定書等を資料として、芭蕉の通つた当時、関沢までが仙台藩、境田から先きが新庄藩領内と断定して居られる。曾良の『日記』には、前引の如く、中山から入口五六丁先に国境の「堺杭」があつたと云ふ。今日の縣境は中山から陳ヶ森を越して、中山から一里程先きに

なつてゐるが、当時は今より大分東に国境があつたやうである。いづれにしても、堺田に泊つた芭蕉は既に出羽の国に足をふみ入れてゐたわけだから、是より出羽の国に、と云ふのは事實ではなかつた。しかし、「是より大山を隔て云々」と云ふより、「是より出羽の国に」と書き出した方が、事実とはちがふにしても、文章としてはるかに力づよく、いかにも心細いすごい深山を越す気分がよく出ると思ふ。芭蕉は制作心理として、「是より出羽の国に」と書き出したくて、そのために宿泊地の出羽の堺田の地名をふせてしまつて、どこに泊つたか分らぬやうな曖昧な「封人の家を見かけて」など、云ふ書き方をしたのはなからうか。かうした例は『笈の小文』の旅の「草臥れて宿かる頃や藤の花」の句の座五を夏の「ほととぎす」から春の「藤の花」にかへたよめに、その句の出来た場所と時を曖昧にしてしまつたのとよく似た制作心理である。

次に、芭蕉は大山を隔て、道さだかならざれば、と書いてゐるのみで、堺田から尾花沢へ出た道程を明らかにしてゐない。それで従来種々の説が出てゐたが、飯野氏は古地図と实地踏査の研究の結果、富沢村の手前から左折して長刀切峠を越し、一羽村から市野々村を経て尾花沢に出る道だらうと推定し、この道ならば、高倉山はじめ「高山森々」たるものがあり、小国川の上流の「水をわたる」所もあり、峠には盗人塚といふものがあり、『細道』本文に最も適はしいとされた(前掲)。而して、曾良の『日記』が出現してみると、飯野氏の右の推定が全くび

つたり適中してゐた事が確められたのである。即ち『日記』十七日の條に、

○十七日。快晴、堺田ヲ立。

笹森、関所有。新庄領。関守ハ百姓ニ貢ヲ宥シ置也。市野々、小国ト云ヘカ、レハ廻リ成故、一ハ子ト云山路ヘカ、リ、此所ニ出。堺田ハ案内者ニ荷持セ趣也。市野々五六丁行テ、関有。最上御代官所也。百姓番也。関ナニトヤラ云村也。正巖・尾花沢ノ間村有。是野辺沢ヘ分ル也。正ゴン前に大夕立ニ逢。昼過、清風ヘ着。一宿ス。

とある。芭蕉等は久しぶりの快晴をよろこび乍ら、堺田を發ち、今の陸羽東線に沿つた北羽前街道を笹森を経て富沢の辺までゆき、明神から赤倉、刎を経て市野々へ出たのであらう。此の間に山刀伐峠といふ、名さへ不気味な峠がある。堺田から荷を持たせた案内者は市野々でかへしたものであらうか。そこから大夕立に出逢ひ乍ら、正巖を経て尾花沢へつき、昼過には清風亭に落つて一宿したと云ふ。『日記』に、正巖と尾花沢の間に村があつて、こゝから野辺沢(今、延沢)へ分れる道だと云つてゐるのは、若し二人が岩出山から、前述の如く輕井沢越をしてゐたならば、此処へ出たのだといふ感慨をこゝに一寸洩らしたものであらう。桃隣は、大体芭蕉らと同じコースを行つたものかと思ふが、『陸奥藩』の前引、尿前の関をきびしく守る、と云つた條のつゞきに、

越へ行ば、笹森・うすき、此間に、かめわり坂有。小くによ

り新庄への脇道也。尿前より関屋迄十二里、山谷嶮難の徑にて、馬足不立、人家纔にアリ。米數常に不自由。別而飢渴の折節、宿不借、可食物なし。二度可通所ニあらず。漸及暮、関屋ニ着て、檢断を尋、歎きよりて一宿明ス。

## 山路 嶮

おそろしき谷を隠すが葛の花

燒飯に青山椒を力かな

是より、尾花沢にかゝり、息を継んとするに、心当たる方留守也。一のしに大石田へ出て、加賀屋が亭に休息。爰より坂田への乗合を求下ル。

このやうに記してゐて、彼は尿前から市野々の関まで強行軍して越したらしく、宿も借れず、食ふべきものもなく、余程づらかつたと見えて、二度と通るべき所でないと思つてゐる。彼が尾花沢で心づもりしてゐた家といふのは清風亭の事であらう。先きに述べたやうに、後の祇空も清風亭を訪ねて一宿をことわられてをり、俳人たちは『細道』の縁から皆清風亭をたよつて行つたものと見え、後には清風の方でもうるさくなつて快く泊めなくなつたものかと思はれる。

芭蕉等が『細道』の旅中、最も心細い思ひをしたのはこの日であり、さればこそ言葉をつくして、その山路のおそろしさを述べてゐるのである。本文に高山森々として「一鳥声きかず」と云ふのは、勿論王安石の鐘山即事の「一鳥不レ啼山更迷」の詩句を翻したものだらうが、詩の不啼を「声きかず」と変へて

ゐるのは、先きの平泉高館の條で「城春にして草青みたり」と翻した手法とよく似てをり、芭蕉の俳語的な巧みなやつし方、翻し方を感じしめる。又つゞいて「雲端につちふる心地して」など、霧といふ難かしい言葉をもち出したのも、杜甫の鄭尉馬潛隴冥洞中の詩から思ひついたのであらうが、芭蕉は文章にこると、どうも殊更に難しい漢文学の素養をもち出す癖があるやうである。

次に本文に「最上の庄に出つ」と云ふ最上の庄は従来種々な説があり、新庄の事だなどといふ説も行はれたが、『隨行日記』が出て来てみると、尾花沢を中心とした、今の北村山郡の北半分位を漠然とさして云つてゐるらしい事が分つたのである。『猿蓑』や『泊船集』に、尾花沢にての作「まゆはきを佛にして紅粉の花」の句の前書に「出羽最上を過て」と記してゐる事や、何よりも前記曾良の『日記』五月十四日の條に、「中新田町・小野田仙台を最上へ道ニ出合。」と記されてゐて、之は宮城縣加美郡小野田から輕井沢峠を越して山形縣北村山郡尾花沢に出る仙台よりの道と出合ふといふ意味で、即ち最上は尾花沢地方をさすものゝ如くである。『細道』本文の「最上の庄に出つ」の辺の前後の文意からみると、『日記』に「市野々、五六丁行テ関有。最上御代官所也。百姓番也。関ナニトヤラ云村也」とある、そのあたりを指して云つてゐるやうである、もつと広くとれば上述の如く解釈してよからうと思ふ。

なほ「此みち必不用の事有」といふのは、「不用」の語が今

日余り普通耳に熟さない言葉だが、追剌に出遭ふなどといふ不都合な事、の意であらうと思ふ。『烏子欄』にも「南部道見やり、尿戸前の関へ行。出羽へこそ道あり。嶮難かた／＼ふやうの所、かたく行ましき道なり」ともある。此の文章は『細道』の影響を多分に受けてゐるらしく思へるが、之も前記の意であらう。『保元物語』新院召三爲に「余りに不用に候ひしかば、幼少より西国の方へ追ひ下して候」とあるのは、乱暴の意に使用つてゐるらしいが、『落窪物語』に「ひりかけの事をぞいみじく笑ひ給ひける。ふようなりける御けさう人かな」とあり、又『狭衣』に「そゞや、まづは不用なり。君のたまへ／＼とつきしろひ」とか、同じく「まろはまして不用なりとて」とあるのは、ぶしつけなとか不都合な、とかの意に使つてゐるのであらう。之らの言葉のひゞきが近世まで伝はつてゐる芭蕉が使つたものと思はれる。

さて、さきの日の「蚤虱」の句では、旅のものうさ・他びしさにある自己を客観視して、之にやゝ興ずる気分の余裕が芭蕉に見られたやうであるが、流石に此の日の難路には、さうしたころの余裕も芭蕉には出なかつたやうである。芭蕉は嘗ての日「野ざらしを心に風のしむ身かな」と詠んで旅に出たことを思ひ、又さきに伊達の大木戸の辺で「道路にしなん、是天の命なりと」観念したことを思ひ浮べた事でもあらう。かうして旅の苦しさを重ね、大自然の中に自己を没入することによつて、芭蕉の詩心はいよいよ深められ浄められてゆくのであつた。病

身な「うすも羅の風に破るゝ如き」芭蕉の体にとつては、「奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへ共、耳にふれていまために見ぬさかひ、若生て帰らはと定めなき頼の末をかけ」と云ふ出發のときの言葉は酔興でもヂェスチュアでもなかつたのである。大垣に無事に辿りついた時、門人達が「蘇生のものにあふかごとく、且悦ひ且いたハ」つたと云ふ文章はしみ／＼と胸にしみとほる思ひがするのであるが、門人たちがさうした気持で師翁を迎へたのも当然であつた。芭蕉自身、「三百余里の險難をわたり、終に頭をしらくして、みのゝ国大垣の府にいたる（紙念）」と記してゐる如く、『細道』の旅を終へて大垣に辿りついた師翁の頭髮の、とみに白くなつたのに門人達はみな驚いたのであつた。しかし、之らの旅の苦しみの中にこそ、芭蕉は自らの詩魂をきたへ、詩境を深めて行つたのであつた。去來が「此行脚（註）細道」の内に工夫し給ふと見へたり」と言ひ、「此年の冬（註）細道」はじめて、不易流行の教を説給へり（抄）と述べてゐる如く、芭蕉のかの深遠な詩論も詩想も多くこの旅の苦しきの中に得、また工夫をこらしたものであつたのである。而して、羽黒の呂丸の『閨書七日草』を信ずれば、既にこのあたりまでに芭蕉は深く悟るところがあつたと考へられるのであつた。尾花沢の清風亭に入つて、芭蕉はほつとしたであらう。清風はもともと談林の惣本寺高政の因みの深い俳士だが、芭蕉が「都にも折々かよひて」と書いてゐる

る如く、紅花の商売上の用件もあつて、京・江戸に屢々出て来た人であり、芭蕉も古くからの知友であつた。四年まへの貞享二年の六月にも江戸小石川に清風をむかへて、清風を客とし芭蕉は自ら主となつて嵐雪・其角・才丸・ユ齋・素堂と古式の俳諧百韻を卷いた事もあり(芭蕉翁占式之俳諧)、同三年三月には又清風を芭蕉・孝白・曾良・ユ齋・其角・嵐雪ら師弟六人でむかへて七吟歌仙も卷いた(橋)こともあつた。さうして、後の巻には曾良

も一座してゐるから兩人共、清風とは旧知の間柄だつたのである。だから、前から訪問の連絡もしてあつたぐらうし、この草深いみちのくの田舎にはるばる訪ねて来た芭蕉等をむかへての清風のよろこびはさだめし大きかつたことゝ思はれる。芭蕉が「涼しさを我宿にしてねまる」くつろいだ気持になつたのは、故なきわけではなかつたのである。

(一九五二、二、六)